

324
394



始



高島平三郎著

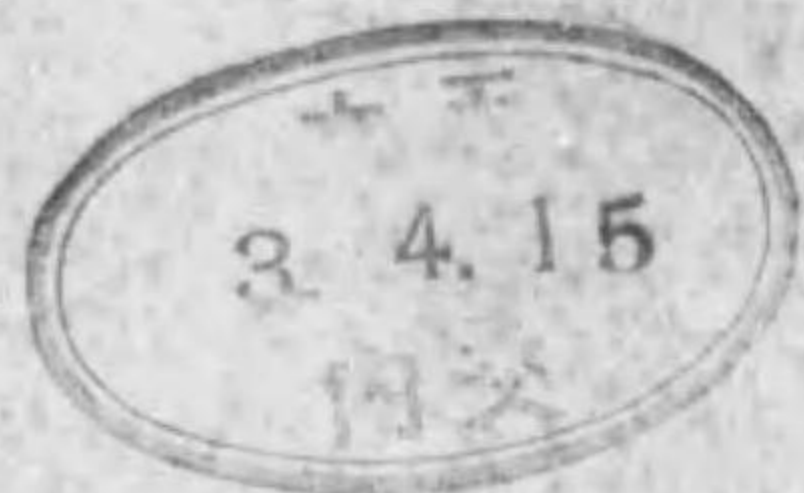
心理學上より
観た



日蓮上人

東京

洛陽堂



序

樗牛の熱なく、嘲風の識なくして、日蓮を論じたる余が演説と文章とを集めたるもの、即ち是れ。而かも彼等は共に余に先き立ちて日蓮を讃仰し、その感想と研究と、斐然章を成して文壇の光彩たり。今に及んで余の此の編を公にする、宛も美人擅場の後醜婦の拙き舞を演ずるが如きのみ。寧ろ無きに如かざるべし。

然れども世に美人の定標を缺けるが如く、日蓮に關するの論、亦定型なし。醜必ずしも醜ならず、美豈に悉く美ならんや。見る所人に依りて異り、感ずる所器に随つて同じからず。余が論拙なりと雖も、亦自ら一家の見あり。未だ悉く二人者の脚跟を踏みたるものといふ可らず。往年余の日蓮に傾慕するや、人あり告げて曰く、第二の樗牛たれと。余笑つて之に答へて、

余は第一の蜻洲にして足る。何を苦しんで第二の樗牛たらんど。蓋し日蓮主義の本領たり。是れ余の今に及んで敢て本書を公にする所以なり。海の内外、豈に醜婦の醜を美とする多少の知己なからんや。

今や社會の各方面に於て、日蓮其人の如き人格を要すること切なり。此の一小冊子、現在及び將來の日蓮を出すに、多少の刺戟たるを得ば幸甚なり。抑も、余が筆舌共に樗牛の熱なく嘲風の識なきこと、自らよく之を知る。然れども、言々句句皆その僞らざるの叫なり。未だ日蓮を識らざる者、之に由りて彼に向ふの動機を生ずるに至らんことは、余の切望して止まざる所なり。

曾て嘲風と最勝間に巴雷氏を訪ひ共に携へて樗牛の墓に詣てしことを追想しつゝ

高島 蜻洲 識

大正三年四月初三

凡 例

- 一、此書は明治四十年二月余が始めて日蓮上人の遺文録を讀みて感激せし以來の講演文章等を編輯せしものなり。
- 二、編輯の次第は何等の意義あるにあらず、余が材料の蒐集を托したる者の得るに隨ひて綴りたるをそのまま印刷せしものなり。されば余が思想の多少變化せる者前後その所を異にするが如きことあり。是れ甚た遺憾とする所なりと雖も余は試刷已に成りたる後之を見たるほどにて今更その順序を更むるは頗る不便なるを以て第一版に於てはたゞ個々の論文を集めしものとしてそのまゝ之を公にすることとせり。讀者之を諒せよ。
- 三、前項の理由なるを以て材料の取捨も充分ならず同一内容が異なる表題の下に重複せるもの少からず。是れ亦讀者の冗煩を厭ふ所なるべきも今

之を改竄すること能はず。加ふるに重複の所にも亦自ら異れる點あり。熱心なる讀者忍びて之を讀まば多少同じからざる光景に接するを得ん。

四、余は全編試刷後に出來得る限り朱黄を加へて誤れるを正し穩ならざるを改めしと雖も速記若しくは筆記に依れるもの、中には甚しく意に滿たざる點ありて到底全部の改更を許さざるものあり。是れ亦豫め讀者の諒恕を乞ふ。然れどもその旨趣に至つては固より余の思想にして或は曲げ或は誤れる者はあらざるなり。

五、余や日蓮上人の研究に於ては極めて未熟者なり。此書を讀まん人その誤れるを指摘しその足らざるを補充して余に教ふる所あらば獨り余の幸のみにはあらざるなり。

大正三年四月初三

著者識

目次

發生心理學より見たる日蓮上人

- 一 緒言.....一
- 二 發生心理學.....三
- 三 人生の發達.....六
- 四 修養期の上人.....一〇
- 五 活動期の上人.....三

日蓮上人の人格

- 一 緒言.....六
- 二 人生の三大時期.....七〇
- 三 修養期の特色.....七一

四	上人の修養法	七六
五	活動期の特色	八一
六	上人の信念	九〇
七	上人の愛國心	九七
八	晩年の上人	九九
妙力小観		
一	總説	一〇三
二	自力と他力	一〇七
三	妙力	一一二
四	東洋の學と西洋の學	一一六
五	日蓮上人及び門下の偉人	一二三
六	現代と上人の鑽仰	一三〇

七	結論	一三六
如是我觀		
一	理想	一四二
二	宗教	一四九
三	佛教	一五五
四	日蓮宗	一六三
五	經驗	一七三
忠愛心の養成と日蓮主義		
一	危險思想	一八〇
二	忠愛心養成法	一八三
三	完全なる個人主義	一八五
四	充實せる現實主義	一八七

世界統一は誇大妄想なるか

一 國民の天職……………一八九

二 統一主義……………一九一

三 地理上より見たる我國……………一九三

四 歴史上より見たる我國……………一九六

五 自覺と妄信……………二〇三

六 國家存立の理由……………二〇六

七 精神的統一……………二〇九

八 結論……………二一〇

唱題の心理

一 緒言……………二二二

二 唱題の意義……………二二五

三 南無とは何ぞや……………二二九

四 妙法蓮華經……………二三四

情の日蓮上人

一 緒言……………二三〇

二 感恩……………二三一

三 愛國……………二三四

四 情誼……………二三五

五 孝行……………二三七

六 博愛……………二三九

日蓮上人の文學

一 緒言……………二四一

二 精神發達の順序……………二四四

三	宗教心の發現	二四七
四	文學の種類	二五三
五	力の文學	二五五
日蓮上人の自覺に就いて		

一	緒論	二五九
二	覺の意義	二六一
三	覺の生理	二七一
四	覺の心理	二七四
五	上人の自覺	三〇〇
日蓮主義の特色		
一	緒言	三〇四
二	統一的	三一〇

三	積極的	三二二
四	國家的	三二四
五	人格的	三二八
六	現實的	三三一
七	結論	三三五
信仰の研究		

一	緒言	三三七
二	宗教の意義	三三九
三	宗教意識の起源	三四九
四	宗教生活の原始感情	三四七
五	信仰過程	三五〇
六	結論	三六一

我國思想史上に於ける日蓮上人の特點

一 緒言……………三六三

二 思想の意義……………三六三

三 地理と思想……………三六五

四 島國の實際的傾向……………三七〇

五 我國思想史概観……………三七三

六 日蓮上人の時代に於ける佛教の勃興……………三八〇

七 日蓮上人の思想特色……………三八四

八 現代の思潮と日蓮上人……………四〇五

其乃往を移す

一 白山先生……………四〇九

二 智學先生……………四一〇

三 明治天皇の崩御……………四二二

四 元良博士の薨去……………四二三

五 最勝閣の美風……………四二四

六 龍山智應兩師……………四一六

七 嘲風と樗牛……………四一七

八 古今同一世……………四一九

目

次

心理學上より
観たる

日蓮上人

高島平三郎著

發生心理學上より観たる日蓮上人

諸君、今日は宗祖上人の六百八十六年の御降誕の御祝でありまして、不肖私も此の莊嚴なる席に御招きに預かりまして、而も其の上人に就いて一場の御話を致すことを得ましたのは誠に私の光榮とする所であります。併ながら私は今から三週間ばかり前に本林の教授清水龍山師から此度御降誕會に就いて何か一場の話をして呉れるやうにといふ御依頼を受けました時

には實は御斷りをしたかつたのであります。併し又私は本林へ参りまして度々御依頼を受けまして丁度充分に之を果すことが出来ないやうな事情がありました。今まで曾て書いたことも無く、又話したことも無かつたのであります。それ故に此度の御依頼に對して殆ど御斷りをする事が出来ませぬ故、已むを得ず承諾した次第で、非常に重い荷物を背負つたやうに感じて、困つて居つたのであります。併し一旦承諾をした以上はどうかして此の務めを果さねばならぬと思ひまして、兎も角も宗祖上人の御一代の事を調べねばならぬ。のみならず其の御遺文も通讀して置かなければ何を言ふことも出来ない。一體是れまで私の宗教に關する智識は殆んどゼロであります。それを其の間に作らねばならぬといふので、勉強して、御傳記を讀み又御遺文を讀んで居ります間に、不思議にも私が先きに重荷と感じたところの感じは何所へか去つて仕舞ひまして、喜んで早く今日が來れば宜

い、どうかして諸君の前に一場の話をして見たいといふ心が奮然と湧起して参つたのであります。諸君、私は確かに此の御遺文から一種のインスピレーションを受けたといふことを信じて疑はぬ者であります。併ながら何を申しましたも唯だ三週間ばかりの見聞でありまして到底諸君を益するやうな御話をする事が出来ると思ひませぬか、私は矢張り私の學問の立場から此の偉大なる人格の一面なり半面なりを考察いたしましたして、之を諸君の前に述べたなら或は私の如き科學を研究して居る者がどういふ風に此偉人を観るかといふことを判斷なさるの一助になるであらうと思ひます。それゆゑに此に掲げて置きました「發生心理學より見たる日蓮上人」といふことに就いて、暫らく諸君の清聽を煩はしたいと思ふのであります。

諸君、曾て或學者が十九世紀は心理學の世界であるといふことを申しました。實に心の研究が科學として發達いたしましたのは、十九世紀であり

ます。それ以前に於ても無論心の學問が行はれなかつたのでは無い、けれども到底此の十九世紀後半、五六十年の間の發達に比することは出来ぬのであります。其の中でも發生心理學と申しますものは最も晩く發達した學問であります。此の科學のおこる前までは人の心といふものを殆ど動かぬ、變化の無いもの、如く見做し發達し進歩して行くものであるといふことは殆ど考への中に置かずして、種々の方面より觀察し色々の假説を設けて之を研究して居つたのであります。然るに十九世紀に起つた所の種々の科學は到底心は不變のもの、發達せぬもの、初めから定まつたものであるといふ風に考へることを許しませずして、心は發達するものである、始終變化して已まぬものである。年と共に進み、時と共に變つて行く、動物の階級と共に複雑高尚になつて行くものであるといふ思想が明かになつたのであります。其の思想に依つて發生心理學といふ科學が起つて來まして一

面に於てはアミーバの如き下等動物の心から、段々進んで動物の各階級の心を觀察し、又他面に於ては人の子供の小さい時から次第々々に進んで往く心の有様を研究し、又他の一面に於ては極めて幼稚の社會から次第に發達して高尚なる文明の社會に進んで行く精神の有様を研究するやうになりました。即ち之を學問上の言葉で言ひますれば、比較心理學、社會心理學といふやうなものが段々現はれて來たのであります。其の中に於ても私が調べて居りますのは先きに紹介のありました如く子供の精神の發達のことであります。子供の心は絶えず進んで居るのです。子供が大人になり大人が老人になるので、誰も初めから老人であつたものは無い。それゆゑ子供から次第に發達して大人となり、大人が變つて老人になつて行く所の變化の有様を研究する學問上の見地から宗祖上人の御一代に於て段々發展して往かれる有様を考察する積りであります。そこで先づ人の發達する状態を

調べて見ますと、生理學者は人は七年にして總ての細胞が一變するものであるといふことを申して居りますが、精神も此の身體の變化に伴ひまして、凡そ七年毎に色々變化が起つて發達して行くやうであります。即ち初めの七年の間は極く小さい子供で、たい成長することを主とし次の七年即ち十四までは少年として學問を稽古する時である。又次の七年即ち二十一年までは青年として一層進んで生活の準備をする時、又次の七年即ち二十八までの間は、凡そ自分の爲すべき所の仕事が決まり、其の後の七年即ち三十五までは人が始めて眞實の世の中に打つて出る時である。それから先きに段々續きまして凡そ七の八倍、即ち五十六ぐらゐまでは衰えずに壯年の有様を保つて行くものであつて、それから後は身體が衰えると共に精神も段々衰へるといふのが極めて普通の状態であります。併ながら偉人となり傑士となり天才となると、斯ういふ通常の法則に當てはまらぬ取り除もあり

ます。私が今申して居りますのは極めて普通の人生を見た點からのごとであります。

扱其の七の數で斯の如く進んで行く人生を更に考へて見ると、凡そ三期に大別することが出来る。其の初めは即ち修養の時代であります。修養はいつまでしたら宜いものであるかといふに、人は修養を長くするだけ段々進むで偉大の事をするやうになつて居るのであります。尤も天才は僅かの修養を以て偉大の事をするのでありますが、普通に申しますれば、長ければ長いだけ偉大なることが出来るやうになつて居る。併ながら大概限りが有る。五十にも六十にもなつてまだ修養と云つて世間へ出ず、働かずに居るといふことは出来ない。孔子も、四十五にして聞ゆること無きものは恐るゝに足らずといはれました。それで唯今申しました如く凡そ二十八歳以後、即ち三十歳前後が此の修養を終はる時期になつて居るのであります。

八

す。其の修養期が済むと、其の次は即ち活動期、世の中に向つて宣戦を布告して大に運動する時代である。此の時代が永く続き、此の時代に偉大の事をする人が豪いのであります。聖人といひ、人傑といひ、或は天才といひ、すべて偉大の人と申すものは、奮闘期に當つてよく他の人が成し得ない事を奮然として成すのであります。それから後に圓熟期に入り、奮闘を收め、活動を平にして圓満に自分の事業を纏め、さうして之を後に傳へるといふのが、人の生活過程の相當の順序であります。併し是等の内容を委しく御話するといふことは、今日の目的ではありません。先づ發生心理學に於て區別する人生はどういふものであるかといふことだけに止めて置きまして、次に宗祖上人に就て考へて見たいと思ひます。

全體日蓮上人の生涯は單に宗教の模範とすべきのみならず、實に一般人類の模範として、立派なものであると思ひます。私が只今申しました修養

期に於ても、亦活動期に於ても、圓熟期に於ても、實に我々の模範とすべき立派の言行をなされたのであります。無論我々が言葉を以て讚嘆して足るものではありません。確かに人類生活の最大模範を示されたものであると思ひます。そこで私は上人の生涯を只今申しました所の修養期、活動期、圓熟期の三つに分けて考察したいと思ひます。尤も上人の生涯に就ては興門派の人のやうに、矢張り之を三つに分けて三十二歳前、即ち始めて此の宗旨を開かれるまでを凡夫の日蓮とし、三十二歳から五十二歳の身延へ入られるまでを上行再誕の日蓮とし、それから五十二歳から六十一歳の入滅までを久遠本佛の日蓮とするといふ説もあるやうですが、私のは斯ういふ意味から見るとは無いです。即ち上人も矢張り普通人間の心身を持つて居られたのであるからして、普通人間の心身發達の上から分けるのであります。

偕てこれから修養期の上人に就て話を始めやうと思ひますが、第一に此の期の特色を擧げて置く必要があると思ひます。一體人間は七歳の頃からして凡そ三十歳ぐらゐまでの間には色々變化いたしますが、之を修養期全體としてその間の特色を擧げて見ますと、此の間は人の心が多くは智力的の方面に向つて働くのであります。それはどういふことであるかといふに、何んでも自分の目に入り耳に入り、思想に現はるゝものは悉く之を珍しく感じ不思議に思うて色々疑問が起る。是はどういふものであらうか、是は何物であらうか、是は何になるものであらうか、是と彼とはどちらが眞理であらうか、どちらが虚偽であらうかといふやうに、直ぐに疑を起して之を研究し、すべての天地萬有を我が心の中に取り込まうとする時代であります。それゆゑ如何なる人でも若い時は色々事を知りたがり、聞きたがる天性が有るのであります。之を哲學上の言葉で申しますれば、

客觀を主觀化して往く時代であります。即ち外界を悉く自分の心の中に入れて仕舞はうとする時であります。唯心論者は天地萬有は悉皆我が一心の所造であると説きますが、人は生れて後まだ物の道理もよく分らず、物と心と對立して居る時にも、矢張り其の心が外界を捉へて自分に化して行く働きをするのであります。それで斯の如くにして色々見たり聞いたりして、皆自分の心の中に取り入れて居る間に、物事少しも障害なく、衝突無しに行けば宜しいが、中々さうは行かない。其の間に種々衝突が起つて来る。一體世間は衝突を以て満たされて居るものでありますから、必ずや何所かに疑が起つて来るものであります。自然界の事を疑ふか、或は人間同志が交際をして居る間に疑が起つて来るか、或は家の事に就いて疑ふか、或は一身の事に就いて疑ふか、何しろ衝突が起つて来るから疑が起つて来るのです。さうして疑が起つて来ると共に自覺期に入つて來ます。自分はどう

いふものであらうか、我は何しに生れて来たか、何をしたら宜いものであらうかといふやうなことが、大きいなり小さいなりに、人の發達して行く間に必ず起つて來るのであります。此の疑の起つて來るのは人生の過程に於て大抵極つて居ります。

それは何時であるかと云ふに、曾て亞米利加のランカスターといふ人が、自國の青年に就いて調べた結果によりますれば、十六年頃がさういふ疑問の起る最初の盛んな時であります。そこで今之を宗教家が始めてさういふ疑問を起し、色々煩悶した時代に比べて見ますと、釋迦如來は十五六歳の時に此の疑問を有つて居られました。即ち始終憂鬱に沈んで居られたから、父淨飯王が非常に心配して色々の樂を以てその心を慰めやうと致されましたが中々効がありません。そこで如來が十七年の時に妃を娶らせましたけれども、其の煩悶は到底そんなことで止むものでは無いから、煩悶に煩悶

を重ねられた結果、二十九歳にして出家せられたのであります。ルーテルはどうかであるかといふに、矢張り十八九歳の時に色々人生に就いて疑を抱き始めたのである。我は斯ういふことで果して神に救はれるであらうかといふことを心配すると同時に大變怖れを抱いて居りましたが生憎と色々怖い物が自分の身に降り掛つて來たのです。或は刀を持つて怪我をするとか、或は自分の目の前に雷が落ちて非常に驚かされるとか、色々事が有つて益々怖れを抱いて、どうしても我はこんなことでは救はれる氣遣ひは無いといふので、大そう鬱いで居たのです。御承知の如くにルーテルは大學に入つて「ドクトル」の學位まで貰つた人ですが、それでも心の煩悶は到底堪へ難く、終に二十二歳の時に神様に誓を立てました。それは私は僧侶になりますから、どうか私を救つて下さいといふのであります。此誓は雷が目前に落ちた時に驚いて覺えず叫んだのであると申しますが、

此くの如くにして、終に出家をして仕舞つたのであります。それからル
テルが働きを始めたのは三十四歳の時であります。又釋迦如來は三十五歳
にして説法を始められました。丁度修養期を了つて世の中に出る奮闘的活
動の多くは三十歳以後であります。それから「ゼスキット」派で有名なる西
班牙のロヨラといふ人にも同じやうな経験がありました。此の人の煩悶し
たことはよく分つて居りませぬが、三十歳にして始めて出家し、三十七歳
にして世の中に打つて出るやうになつたのであります。孔子のことはよく
分つて居ます。孔子は十有五にして學に志すといふて居られますが、此の
學に志すといふことは、何か自分の心に不足を感じたから學問をする氣に
なつたのでありませう。さうして三十にして立つといはれた。即ち三十歳
になつてから世の中に向つて、自分の説を弘め、自分の主義に従つて行動
して往かれるやうになられたに違ひありません。それから又耶蘇教の一派

を開いたヤンセンといふ人も三十四歳にして始めて自分の説を立てました。
斯の如く昔から偉人と言はれ、聖人と言はれる人は大概修養期の半ばに於
て懷疑に陥り、そして長い間、苦心慘憺して其の解脱をはかり、終に其
の得たところの結果を世の中に出したのであります。

我が日蓮上人はどうであつたか、即ち十二歳にして清澄山に入つて勉強
された。其の以前の上人はどういふ人であつたかと云ふに、眞實傳に依つ
て見ますと誠におどなしい、親孝行の方であつて、親の言ふことを聞いて
背かれたことは無く、生物は殺されぬと書いてあります。一體豪い人の
ことは矢鱈に褒めて書いたものが多いのですが、上人の此の事は傳記に
依つても、亦自ら書かれたことから考へても、事實であつたらうと思はれ
ます。上人が確かに親孝行であつたといふことは分つて居ます。大そう勉
強家で記憶の好かつたといふことも分つて居ます。今是等の事から綜合し

て幼時の上人の心的傾向を考へて見たいと思ひます。一體人は子供の時に其の心的傾向を二つに分けることが出来ます。即ち動的型式 Motor type と感的型式 Sensory type とであります。動的型式に属する子供は始終デツとして居ないで、生物を殺し弱い者を窘め、人と喧嘩をすれば、直ぐに拳骨を揮り廻すといふやうに、絶えず活潑な動作をするものです。併しさういふ者であるからといって必ず悪いといふことは申されません。かういふ型式の者から後來軍人又は政事家の如き活動的事業家として成功するものが出るのであります。それから感的型式に属するものは誠におとなしく、言ふことも爲ることも、すべて静かに優しいのであります。さういふ型式の人からして、學問上の天才が出るのであります。

そこで恐らくは上人も幼時は寧ろ「センソリータイプ」であられたらうと思ひます。此の天才的型式に属する少年が清澄に上つて修業をして居られ

る間に非常に變化發達せられたと思ひます。即ち上人の年譜に依れば十六歳のときに始めて剃髪されました。他の書に依れば十八歳とありますが、いづれにしても丁度私が前に申した如く、修養期の半ばに於て出家されたのであります。十二歳から十六歳まで、五年の間色々當時の學問に就いて研究を致され、それから出家されたのであります。其の頃にはもう心中に大疑問が萌しつゝあつたといふことは明かであります。師匠道善坊に向つて色々の事を問はれましたが、どうも其の答には満足が出来ません。そこで自分で色々の研究をされたけれども、矢張り満足が出来ないから、終に虚空藏菩薩に「どうか佛教の眞理が分りまするやうに」といふ願を懸けられました。而も其の熱心の極氣絶し吐血せられたといふことであります。是等の事實で如何に此修養期に當つて、上人が熱心に自分の選んだ學問に就いて研究されたかといふことが分ります。修業中に氣絶するといふが如き

事實はひとり上人のみならず、熱心の人には往々あることであります。ル
 一テルも矢張り寺に在る間に熱心に考へて氣絶して仕舞つて、同じ仲間の
 者から僅かに扶けられたといふことであります。上人は斯くまで熱心に勉
 強されて、終に三十二歳にして始めて宗門を建てられました。是は私が申
 すまでも無く、諸君の方が詳しいのであります。私が今日特に學生諸君
 の爲めに話したいと思ふのは、上人の修養の方法は、實に我々の模範とす
 べきことであるといふことです。

一體人の修養は如何にすべきであるか。人としてどういふ修養法を取る
 のが最も適當であるかといふに、私は常に「ピラミダル、ブレバレーション」
 Pyramidal preparation. といふことを主張するのである。それはどういふことか
 と云ふに人の世に立つ準備修養は「ピラミッド」のやうにせねばならぬ。即ち
 學問をするには、出来るだけ多くの方面より、出来るだけ精密に材料を集

め出来るだけ堅固の基礎を置いて、其の上に段々と智識經驗を積んで往く
 のである。「ピラミッド」は非常に廣い深い基礎を置いて、其の上に築き上げ
 たので頂上は唯だ一つの石である。一つの石が空中に突出して何千年の間
 屹として立つて居るのである。人も此の如き基礎を以て世に出れば、如何
 なる偉大なる勢力を以てしても壊すことは出来ないのである。然るに石を
 積むに基礎が確かりして居らぬ時には、如何に其の石は高くとも子供が一
 寸押しても直ぐにヒツクリ反へるのであります。吾々が學問するのも其の
 通りで、専門の學問をするからというてたゞ偏して仕舞つて、其の専門の
 本だけ読んで居るやうでは到底偉大なることは出来ず。従つて偉大の人物
 にはなれぬ。それゆゑいつも「ピラミッド」の如き形を取つて進んで往かなけ
 ればならぬのであります。それで古今の學者、或は宗教家、其他苟も精神
 の事に關係した人を調べて見ますならば、何人か此の偉大なる準備をし

ない人がありませうか。悉くそれでありませう。

諸君近世哲學の最も偉大なる人と言はれたカントはどうかでありましたか。カントは哲學者であるが、此の哲人は大學に於て地理學の教授をして居た。又數學の教師をして居たこともありませう。カントは又天文學に就て立派な學説を立てた人でありませう。それから又教育に就ても一家の見を持つて居つた人であります。斯の如く哲學者と云うても有ゆる方面に自分を向けて、さうして何物に向つても殆ど可ならざる無き準備をして居つた人である。又十九世紀に於て最も大きな文學者として稱讃されて居るゲーテはどうかありますか。一面には美文を以て天下後世に名を成して居るけれども、他面には又心理學者として有益の研究をして居る。一面には又進化論者として殆ど専門の學者が氣の付かぬやうな研究をして居ると共に、又他面には礦物學を研究して居る。一面には哲學をもやり他面には政事をもした人で

ある。斯の如く色々の事を研究し、色々の興味を持つて、何れにも有益なる貢獻をなした人であります。又近世醫學に非常の貢獻を爲したウヰルヒョーといふ人はどうかでありますか、此人は議員とし政治家として非常に働きました。がそれと共に病理學の上に、或は生理學の上に、否有ゆる醫學の上に革新を起す程の研究をした人であります。又英吉利の宰相グラッドストーンといふ人は、大宰相として有名の人であつたと同時に、希臘の古典を調べることも大そう好きであつて、大學に在つて希臘の古文學の講義をしました。又英吉利の大藏大臣であつて後に總理大臣となつたバルフォアといふ人は有名なる哲學的宗教的書物を書いた人であります。殊に面白いのは瑞西に現在居りますフォレルといふ學者である。諸君は恐らくはフォレルといふ人の名は御聞きになつたこともありませう。私は此人の事に就いて石川千代松君から次のやうな面白い話を聞きました。或時石川さん

がバルトンといふ工科大学の備教師と共に船に乗つて三浦三崎へ参りました時に、浪が出て大さう船が揺れたことがありました。然るに流石は學者遠であるから、さういふ時にも色々浪の學説が出ました。例へばどの位の風が出た時には、どれだけの力があつてどれだけ浪が高くなるとか、或は浪と風との摩擦がどうであるとかいふやうにいろ／＼の議論が出て中々分らぬ。そんなことを研究するのは中々なみ／＼ならず骨の折れることであらうと思ひますが、其の話の序に浪のことに就いて誰か良い著書が出来て居らぬだらうかと石川さんが尋ねたら、バルトンがフォーレルといふ人の書物が良いと云つたそうです。それから後に石川さんが蟻のことを研究する時にいろ／＼の人の書いたものを調べたが蟻の精神作用に就いて最もよく研究されたのは矢張りフォーレルと云ふ人の著述である。どうも可笑しい浪の研究をした人と同じ名の人だと思つたけれども、其書物を読んで見る

と中々良いことが書いてある。此の書物は私も現に読んで見ましたが、なか／＼よく調べてあります。其の後石川さんが獨逸に行つて催眠術のことを調べたいが誰の著書が宜からうかと其の道の人に聞きましたら、それはフォーレルの書物が良いといふ答でした。そこで石川さんは又同じ名である不思議なこともあるものであると思ひましたが、其の本を読んで見ると中々詳しいことが調べてある。それから後に段々調べて見ますと、此の人は瑞西の人で其の専門は精神病の醫者であつて法學博士の學位を持つて居るさうです。さうして前の著書は皆同一の人のであつたことが分りました。即ち醫學上ばかりでは無く、浪のことに就いても良い著述をした人、又蟻の精神に就いても調べ、催眠術のことも書いた人である。是等は悉く一人の精神病の醫者たるフォーレルの仕事でありました。斯の如くに西洋では一の學者と言はれる人は多方面に向つて深い研究をして居るのであります。

それから又伯林大學に現在教授をして居りますコーラーといふ人は法律、殊に破産法専門の人でありますが、刑法、治罪法、民法、刑事訴訟法にも通曉して居て、どの講義も出来るから、毎年色々變つたことに就いて講義をして行くさうです。しかのみならず哲學にも美術にも通じ、殊に音樂は中々上手であるといふことです。かやうに昔から今まで苟も學問界や、宗教界に於て名を成したやうな人は、實に深く廣い研究をして居るのであります。

そこで日蓮上人の修養期に於ける研究法を考へ合せて見ますと、實に敬服に堪へぬのであります。上人は十二歳の時始めて清澄に往かれたのであります。が其の時どういふ事が書いてあるかといふに、「聰明穎悟であつて耳目に觸るゝ所永く記して忘れず」とあります。是れもたゞ豪いことを嘆美して書いたのであると云うて仕舞へばそれまで、ありますけれども、決してさ

うではありません。私は此の通りの事實があつたと思ひます。それは前に述べた通り感的型式のおとなしい人は特に覺えが良いものであります。人間一生の間に最も覺えの良いのは何時であるかと云ふに、それは人の賢愚にも由りますが、十一二歳から二十歳位の間に一番宜しい。其の中でも十五六の時が特に良い時であります。それゆゑ私は上人に就いて記されて居ることは確かな事實であると思ひます。それで先程御話したやうに佛に向つてまでも佛敎の眞理を明らめたい、自分の疑問を霧らしたいといふ願を立てられた。上人の生涯は此の心がズツと一貫して居る。さうして何をなさるに就いても熱心なる信念が中心になつて居ます。清澄に居られる時に既に一切經を閲讀致されました。一切經と一口に言へば譯の無いやうに思はれますが、此の時代に渡つて居つた一切經は無論宋版のものに極つて居ます。元や明のでは無い。一切經も後には色々渡つて來たのであります。

御承知の通り麗藏は六千四百六十七卷、宋藏は五千七百十四卷あります。何しろかく大部の書物を此の時代に於て研究され、而かも前後五回此の書物を閲讀せられたといふことであります。其の第一回として清澄で研究なされた時は、實に茫漠として依る所なく、煩悶に煩悶を重ね疑問に疑問を重ねられました。併し熱心に研究して居られる間に自分が後來の立場として取るべき所のものを認められたのであります。此所が實に大事である。人が勉強するのに何の目的もなく無茶苦茶に新聞雜誌を讀むやうに本を讀んでも、唯雜駁の學者になる計りで仕方がない。疑問があるならば大疑問を起し、煩悶があるならば大煩悶をなし、さうして捉へるべき所のものを捉へ、何等かの光明を其の間から認めなければなりません。

我が日蓮上人は五千餘卷の經文中、無量義經に於て法華經の光明を認められたのであります。けれども實に用心深い方であつて、其れに違ひ無い

と直ぐには決定され無い。是れは誠に常人の陥り易い點であります。上人はそれをされなかつた。其の證據には丁度二十歳の時鎌倉に往かれ、さうして始め光明寺に入つて淨土宗を研究され、續いて律、或は禪といふやうに色々研究されました。それは何の爲めであるかといふに、自分の認められた光を確めるには現在に成り立つて居る宗教を充分に調べなければならぬといふ御考からであります。此の頃鎌倉の有様はどうであつたか云ふと、それは無論歴史に書いてあるけれども、私は此の間面白い話を聞いた。それはヤクザといふ言葉の出所である。何んでも詰らぬことをヤクザものといひますが、是れは鎌倉時代に役目で座禪をするものがあつて、本當に心が入つて居ないから役座といつたのから起つたのであるといふことです。其のくらの鎌倉は禪が盛んであつたのです。上人はさういふ所へ往つて禪も律も色々研究をされました。それから又廿二歳にして叡山に登つて天台

を學ばれました。そこで色々経文に依つて研究されたのは勿論でありま
すけれども、其の以外に朋友から得られ、或は叡山の自然から得られた感
化も必ずや偉大であつたらうと思ひます。それから梵字悉曇に至るまでも
研究をされました。又其の間には京都に往つて此の頃有名の臨濟の圓爾で
あるとか或は曹洞の道元であるとかいふ人に依つて禪を研究されました。
上人が二十五歳の時には宋の國から道隆が歸化して來ました。さうすると
上人は直ぐに其所へ往つて色々宋の話聞かれ、又此の人の持つて來た
宋刊の書物などは皆借覽せられました。實に此の時の上人の修養の有様を
考へて見ると、謂はゆる渴者の飲をなすが如く、苟も眞理の存する所は何
所へでも往つて研究されたのであります。又其の當時三井寺へも往かれ、
二十七歳の時には奈良へ往つて色々な研究を致され、高野山へも天王寺へ
も往かれました。斯の如く上人は自己の研究するに足ると信せらるゝ所は

力の限り調べられたのであります。

殊に三十歳に成られてから後は、京都の天王寺屋の家に泊つて居られ、
さうして大學三郎に依つて儒學を研究せられました。子供の時には無論儒
學も學ばれたのでありませうが、三十歳にもなつて更に大學三郎に就て學
び、それから冷泉爲家に就て和歌を習ひ、或は東寺に入つて眞言の極意を
究められました。其の他上人は繪も描かれ、彫刻もせられ、後には神道も
學ばれました。即ち既に開宗せられた後の話でありますけれども吉田兼益
といふ人に依つて之を調べられました。文章はあの通り上手であつて、書
も大さう巧みに書かれました。又佛教の研究に最も必要なる梵字悉曇等の
外國語までも研究せられ、和歌も巧みに作られました。即ち概して言へば
上人は當時のありと有ゆる學問を學ばれたのであります。そこで此の時社
會一般の状態はごうであつたかと云ふに、上人が誕生になるつい一年前

ある、五千人の關東の兵隊が集まつて院宣の讀める者が無かつたのであります。實に社會は無學、學問を尊ばぬ時代であつた。之に反して佛教は中々盛んに行はれた時代であつたが、社會一般の状態、此の如き風である時に當つて、新しき宗門を開くといふ事は實に困難であるのです。兎も角上人は自分の力の及ぶ限り學問をせられた。十二年からして三十二年まで、二十年の間千辛萬苦して修養せられたのであります。私の所謂「ピラミダール、プレバレーション」は立派に出來上つたのである斯の如くにして打ち立てられた教であるから、天下に打つて出で、後は何物も敵することは出來ない。「ピラミッド」も基礎が薄弱なら直ぐに倒れて仕舞ふのである。諸君、私は諸君が上人の此の修養の精神と方法とを學んで、斯の如き「プレバレーション」を致されることを切望するのであります。今日の状態はどうでありますか。今日は一面には學問をするに當つて非常に固陋である。寧ろ

氣取るのであります。例へば中等教育に従事して居る者であつても、歴史をやつて居ると、私は歴史専門家であるから他のことは一向知らぬと濟まして居る風がある。併し是等の人が専門家と言はれるかどうか疑問である。僅に五冊十冊多くて二三十冊の書物を読んで最早私は専門家で御座ると大顔をする。之を上人の孜孜汲々として自分に直接關係の無い事まで研究せられたるに比したら、彼は何の顔あるであらうか。又他面に於ては雜學の徒が多い、新聞學問、雜誌學問、或は演説あさりといふものがある。これは自分は勉強せずに無茶苦茶に人の演説をあさつて歩くのであります。さうしてこんな人物に限つて何か著書でもした時には、澤山人の名前を列べてコケ威しをする。さうすると俗人は彼の人は豪い、澤山學者の名を知つて居るといふのです。併し名を調べるなら人名字書を持つて來れば何千人でも擧げられる。斯の如く固陋にあらざれば雜學に陥いるといふことは

最も諸君が戒めなければならぬことである。廣くするのは宜いが、唯列べる丈で積み重ねることがなくつてはいけない。即ち多くの材料をちやんと一の目的を以て「ピラミッド」のやうに積んでゆかなければならない。換言すれば組織的に積んで往かなければ幾ら研究範圍を廣くしても何の役にも立たない。そこで興味は飽まで廣くし、之を組織的に組み立て、自分が宗敎家なら充分宗敎に使つて往く。教育家ならすつかり教育に使つて往く。自分の目的に有ゆる材料を悉く使ふやうにしなければならぬ。それをやらすして無茶苦茶に範圍を廣くすれば自分が興味に支配されるやうな人間になつて仕舞ふ。それは實に歎息に堪へないことである。此の點に於て私は實に上人に敬服するのである。上人に敬服することは多々ありますけれども、勉強の仕方即ち修養の形式といふことは私が調べて居る發生心理學の上から見て立派な一の模範である。修養期にある人は皆之に依つて學んで

往かなければならぬと考へるのであります。此のことに就いてもつと長く御話したいのですが、時が容しませんから、遺憾ながら修養期の話は是れだけにして置きます。

次に進んで活動期の上人のことに就いて御話を致します。一體人生は活動、即ち言ひ換れば奮闘である。人は修養期に充分準備をなし終へたら、必ず社會に出て働かなければならぬ。社會に出て働きをする時分には前途の成功を期して戦ひ始めるのである。是れは何人も豫期して置かなければなりません。戦ひと云つても必ずしも鐵砲で撃つとか、刀で斬るとかいふことばかりでは無い。確かシヨツペンハウエルであつたかと思ふ *Kein Sieg ohne Kampf*。「戦さが無ければ勝つといふことも無い」と言つたことがある。私はそれを「戦さが無ければ生活はない」と言ひたいと思ひます。人は生活して居ると同時に絶えず戦さをして居る。無意識的に戦さをして居るのであ

ります。我々は絶えず空氣に刺戟され絶えず温度に刺戟されて居ます。或は「バクテリア」の刺戟であるとか、或は病毒の刺戟であるとか、常に色々の刺戟を受けて、いつでもそれと争つて、それに打勝つて居るのであります。若し我々に之が出来なかつたならば生活することは出来ないのです。空氣はなか／＼壓力を持つて居る。人が弱ければ空氣に潰されて仕舞ひます。諸君は決して空氣に潰されたといふことは無いでせう。我々人間が相當の年になつて、即ち三十歳以上になつて世に立つといふ時には、必ず戦が起つて来る。此の際に當つて優勝の位置を占めるには何がその主力であるか、即ち意思である。前の修養時代には智識が主として働いたが、此期には意思が充分働かなければなりません。全體自分の思ふことを成し遂げて行く力は勇氣であつて、勇氣の根源は意思であります。我々が世に立つて働くには充分堅固な意思を以てかゝらなければなりません。修養期

には客觀を主觀化する働をした。即ち外界の總てを取り入れて謂はゆる萬法を唯心に歸せしむるのであります。然るに活動期に於ては、其の我が頭の中に入れた智識材料を本として、一の主義を立てるのであります。我が確信を立て我が事業を擇ぶのであります。其の主義、其の確信、其の事業が、世間に向つて出て行く。即ち主觀を客觀化してゆき、我が主義に他人を化して行く時代であります。之をせなければ人は決して完全に務を盡したとは言へません。否、それはみな事實行つて居るのであります。豆腐屋が豆腐を擔いで賣つて居るのは何の爲めであるか。豆腐屋は自覺せぬであらうが、彼は毎日豆腐々々と云つて社會を豆腐化して居るのである。これは丁度我々が色々の學問をして其の學問を以て天下を化して往かう、總ての人が自己の學問、自己の信仰、自己の主義に化するやうにと思つて奮勵するのと同じことでもあります。

活動期にはかういう特色があるのでありますが、此の特色も實に上人に依つて模範を示されて居るのであります。上人の出られた時はどうであつたか、前にも言つた通り社會一般にまだ學問などは開け無い時であつた。然るに佛教は最も盛んに行はれて、上人の生誕される前四五十年の間といふものは、著しい宗門が二つも三つも出来て居るのであります。一方では北條氏のやうな権力あるものが禪を非常に信じた爲めに禪が勢力がありました。かやうな世の中に上人は生れて來られて、さうして一の宗旨を立てられたのであるから、一として都合のよいことは無く、全部世の中を敵とせねばならぬのであります。それゆゑ我が偉大なる上人は奮然蹶起、自己の確信自己の理想を以て徹頭徹尾戦はれたのであります。上人は實に理想家でありました。是れは私が言ふまでも無く諸君がよく知つて居らるゝこととあります。即ち一天四海皆歸妙法といふことが上人の理想であつたに

相違ありません。つまり此の紛々たる總てのものを妙法に歸するといふのが上人の理想であります。妙法と云ふは何んであるか。私が諸君の前に向つて此の話をするのは謂はゆる釋迦に説法で或は諸君の笑を買ふかも知れぬが、私の妙法を解釋したのは次の通りです——私はまだ法華經を充分研究する暇を有ちませぬが、これから大なる興味を持つて諸君と俱に此の研究を遂げたいと思つて居るのであります。それで此三週日の忙しい間に讀んだのであります。上人の書かれた法華和讃といふものに斯ういふことがある。「妙法更に外なし。我等の一心とこそ聞け。心佛衆生は一つなる。圓頓法華の妙理なり。」即ち此の言葉によつて私が自己の考を述べて見ますると、妙法即ち佛陀、佛陀即ち釋迦、釋迦即ち上人であつて、我々の心が完全になるならば、吾々衆生も妙法即ち佛陀となり得ると考へます。それゆゑ一天四海皆歸妙法と一般衆生をして佛性を發揮せしめるといふことが

上人の理想である。全體佛の四十年の間説かれた教といふものは、今まで印度から支那、朝鮮を経て我國にまで弘まつたのであるが、佛が最後に説かれた最も大切なる法華經の教はまだどの國にも充分弘まつて居らぬのである。それを我が日本から發達させ西に向ひて逆行して天下を統一しなければならぬといふことが上人の御考であつたことは何人も信じて疑はぬ所でありませう。

扱、斯ういふことを考へて見ますと、諸君の如き信仰を持つた人は何とも思はれぬでせうが、往々そんなことは無い、徒に大きなことを言ふに過ぎぬ。一天四海皆歸妙法などと到底そんなことが出来るものか。日本のやうな小ほけな國、日蓮上人が言はれた如く日本は小島である、主權者は小島の主である。こんな小ほけな島國であつて逆も四海統一などといふ偉大なることが出来るものでは無いと云ふものもありませうが、私は決してさ

うで無いと思ふ。即ち此の妙法に四海を化さねばならぬといふことは、言ひ換へれば文明の統一である。佛教といふものは即ち人の精神の一部分を支配するものではなく、我々の總てを支配するものである。即ち我が心の全體を支配して安らかにするものであります。左すれば我が心、即ち佛であるから、人の心より起つた文明が一として佛教に關係無いものは無いと思ひます。この點より言うて見ますと、上人の期せられた四海統一の理想といふものは、此の宇宙に佛陀といふものがあり或は神明といふものがあるならば、此の理想が佛陀の意思であり、神明の意思であります。即ち今日の日本はどうであるか。現に文明統一の事業を成しつゝあるのです。諸君暫く私と共に五六千年に立ち戻つて、波斯の平原に遊ばれむことを希望いたします。我が人類の文明は何所から出發いたしましたか。學者の説紛々として一に歸する所は無いやうでありますが、何人もチグリスユーフレ

ト兩河の間なるメソポタミヤの平原を以て文明の最も早く現はれた所とするに躊躇する者は無いでせう。其の文明が一面東して印度に至り支那に至り、朝鮮に至り、終に日本に來つたのであります。即ち東洋的文明といふものは我が日本に來て最も高い發達を爲したのであります。一方の文明は西して或はアビシニア、或はアラビヤ、或は埃及、或は希臘、或は羅馬、カルセーデ、西班牙、英吉利、佛蘭西、有ゆる歐羅巴に蔓つて、歐羅巴全洲もはや往く所が無くなつて仕舞つて、終にコロンブスの船に乗つて遠く大洋を越えて亞米利加に渡りました。亞米利加に渡つてから其の文明は非常に發達して、終にはコムマンドル、ベルリの船に乗つて遠く我が日本に來たのであります。

諸君總て物は變つた要素が澤山集まり、それがよく統一され、組織されて始めて良いものが出來て來るのであります。我が邦は地理上からいうて

も歴史上からいうても、丁度世界の文明を統一する所の任務を帯びて居るのであります。今現に我が國民は文明の統一に従事しつゝあるのであります。諸君試に見られよ、聴衆諸君中にも頭は西洋風に斬髪にして衣服は依然日本風の人が多いでせう。職工などには洋服を着て帽子を冠り高下駄を穿いて傘を翳して居るものがある。是等は實に東西文明の統一者である。併し是等は形に見えるから直ぐに分るけれども、形に見えない所も皆、其の通りであります。東京の中等以上の人の家に往けば先づ應接間があつて、そこには大概椅子テーブルが置いてあります。書棚を見ると西洋の本があり、日本の本もあれば、支那の本もあります。或は釋迦の經文もあれば、孔子の傳記もあり、ガントの哲學もあれば、ゲーテの詩もあります。或はあつちの方にはバイブルがあり、こつちの方には日蓮上人の遺文録もあるといふ有様であります。之と同じやうに、私が今講演をして居る此の頭

の中にも矢張りカントも入つて居れば、ダルキンも入つて居る、此の邊にはゲーテ、彼の邊には白樂天、こつちには日蓮上人、こつちには基督も入つて居る。即ち昔から何千年已來何所にも文明は澤山あつたけれども、我が邦今日の文明の如くに有ゆる世界の文明を統一するのに適當した國は無いのであります。それゆゑ上人の説かれた所の理想は我々の見ぬ間に着々實行されつゝあるのであります。

併ながら上人が度々警告せられた如くに、國民が奮發して妙法を眞に我が邦に於て完全にすることを努めず、我が力我が人格を悟らずして、ボンヤリして居ますならば、彼の碧眼紅毛の人がドン／＼我に代つて天職を完うするやうになるのであります。諸君我が邦の文典は諸君は中等教育に於て既に習つて居られるであります。併ながら此の文典を最も組織的に最も科學的に書いた最初の人は何人でありますか、チャムパーレーン、とい

ふ元大學の御備教師たる英人でありませう。諸君我が邦の美術は世界獨歩である。其の我が邦の美術の眞の妙味に始めて注意して世界に紹介した人は誰でありますか。フェノロサといふ元大學の教師であつた米人でありませう。諸君我が邦は人類學に於て最も多くの材料に富んで居ります。殊に大森の海岸で貝塚を發見して之を研究したのは誰でありますか。是れはモールスといふ元大學の博物學教師たる米人でありませう。諸君北海道の「アイヌ」は世界無比の人種でありますが、之に就いて殊に其の言語に就いて最初に充分研究したのは誰でありますか。ハチエラーといふ英國の宣教師であります。斯の如くにして我が日本國民が文明の統一に就いて自覺せず居るならば、續々外國の人が取つて代つて仕舞ふであります。佛教に就いてもさうである。歐米人は非常な精力を以て研究しつゝあるのに、我が邦に於て一向振はぬといふこと、——而も我が邦に於て始まり我國に於て

發達して、あらゆる佛敎中最も進歩したものであるといはれて居る此の法華經のことに就いて研究もせず、聞きもせぬといふことは大に我が國民の缺點であらうと思ひます。私自らも今まで斯ういふことに心を寄せず別に研究もしなかつたのは自分の缺點であつたといふことを曉つたのであります。それゆゑ聽衆諸君の中にも從來の私のやうな人があるならば、是れから共に斯ういふことに就いて研究し、お互に折角此の目出たい、折角此の偉大の希望を有て居る時代に生れた甲斐には、せめては文明統一の理想の一部分たりとも進んで實現したいと思ふのであります。併ながら私が斯ういふことを言ふのは唯上人の四海統一の思想から思ひ付いて言ふのでは無い。又私が日本國民であるから特に日本を褒める爲めに斯ういふことを言ふのでは無い。之を先きにしてはアーノルドといふ英吉利の詩人が非常に日本のことを稱讚して書いた物を見、之を後にしてはラフカヂオハーンと

いふ人が非常に驚いて日本を世界に紹介したのを見ても明である。其の外さほど名の無い人であつても歐米人にして日本をよく觀察し、且つ世界の大勢を達觀するほどの人は、日本は將來東西の文明を統一する國民である、日本は將來新文明を造り出す國民であることに氣が付いて居るやうです。現にそれは事實になりつゝあるではありませんか。此の際我が國民、殊に宗祖上人を奉じて居る所の學生諸君、宗祖に對しても此の一天四海皆歸妙法の大神を奉じて充分活動せねばならぬのであります。

此の點から申しますと上人は非常なる愛國者であります。之に就いては毀譽紛々として、上人を罵倒する者は日本を小島である、日本の執權者を小島の主である、或は日本の神は小さい神である、日蓮に下座をしなければならぬものであると言つたから、非常に不忠者であるといふやうに考へる者もある。それから中には愛國者なんぞとそんな小さな者ではない。國

家以上の者である。超國家的偉人である。愛國者など言ふのは却つて上人を小にするものであるといふ者もある。批評は斯様に兩極端に走つて居る。總て偉大なる人格は皆斯の如きものであります。大悪人にあらざれば大善人と言ふほごで、平凡の人は誰が見ても彼の人は良い人だ彼の人は悪い人だといふことが分るが、偉大の人といふものは斯ういふ兩極端の見方をされるものであります。併ながら是等は多く感情から來るか或は冷なる理性のみから來る結論であります。私が上人を愛國者というたのは唯だ感情的の意味や純粹の理窟からばかり考へたのでは無い。矢張り人として日本國民としての上人の説かれた佛教上の學說を研究して得た考である。即ち上人の思想によれば佛教といふものは實に尊いものである。その佛法の中でも一番尊い法華經が他の國に弘まらずして、我が日本に來て丁度佛の豫言に合うて弘められるやうになるといふことは國家の名譽此上も無いこ

とである。之によつて此國を救ひ此國民を救ひ、さうして此の國を基礎として段々之を四海に及ぼして行かなければならぬといふことを考へられた。故に上人の愛國心は唯だ國が取られるとか取られぬとか言ふ目前の問題では無く、一層根本の問題である。即ち内亂もなく外患もなくするには法華經を弘めなければならぬと確信して之に努められたのであります。國家を愛する者でなければ決してさういふ考は起りませぬ。どうでも宜いといふ者には決してさういふ考は起りませぬ。故に上人の愛國心は唯だ頑固者流の言ふやうに、日本國は外國より優つて居ると無茶苦茶に褒めるのでは無い。自分の信じて居る眞理を歸納的に説き演繹的に論じた結論として國民の使命を認められたのである。詰り無差別主義と差別主義、世界主義と國家主義とが一致して居る。佛教には國家の區別は無い、是れは世界的である。併し之を此の日本に弘めなければならぬ。日本は法華經の弘めらる

べき運命を有つて居る。此の點から言ふと國家的である。故に上人によつて兩主義は統一されたのである。全體上人の教は煩惱即菩提、娑婆即寂光淨土である。さうして見れば現在娑婆である此の國家を愛するといふことはやがて淨土化するの基である。併し愛するといつても所謂執着の迷ではない。此の國民に法華の大覺を與へるといふのであるから是れこそ眞に根本的愛國心であると思ひます。

次に上人の信仰といふことに就いてお話ししたい。是れは先きにも申したやうに人が奮闘的生活、活動的生活をするに就いて殊に大事なことであります。上人の信仰の堅固なことは金剛石の譬も足らぬので、殆ど此の世に物質として譬を引くべきものは無い。然るに此の信仰に就いて今日最も多くの者が議するのである。即ち迷信家であるとか。唯だ天地人間の變災を利用して宜い加減に胡魔化した人であるとかいふやうなことを説くのです。

一體純粹にたゞ一通りの學理上の頭から見れば、昔の宗教家のことは皆迷信と見える。一面から見ると今より四五十年前の人は殆ど皆迷信を持つて居つたのです。併ながら此の間に今日の學說から見ても立派に解釋が出来る堅い信仰があつたのであります。現に西洋の學者なども大變に尊敬し、宗教家は殊に崇めて居る所のマルチン、ルーテルの如きも彗星と人事の變災との關係を信じて居ました。一體學問上の學說といふものは日々に進歩し變化して往くもので、決して萬古不易の眞理といふものは今日成立つて居りはせぬ。それゆゑ信仰も其時代の學說と合へば眞の信仰とし合はねば迷信とするのであるから、迷信と見做せるものも學說上の根據を得て眞の信仰になるものがないとはいへぬ。科學者が一概に迷信といふ中にも學說上から説明すべき餘地は現に澤山ある。唯だ一概に古人の確信を妄信である。迷信であると考へるのは最も間違つて居る。是れは唯だ學者俗人間にある

のみならず、宗教家夫れ自らに於てもどうも斯ういふことは疑はしいと思ひつゝ、宜い加減にして置く者が少くないやうであるが、これは實に嘆ずべきことである。全體信仰といふものは唯だ宗教に必要であるばかりでは無い。學問をするに就いてもなくてはならぬものである。私は少しも信仰はありませぬと言ひ得る人があらうか。さういふ人は明日を有ることも無いとも思はぬであらうか。世間には随分自分に經驗しないことでも信仰に依つて成立つて居ることが澤山あります。

そこで先づ第一に私の言はうと思ふことは、上人は本地垂迹といふことを信じて居られた。是れは上人のみならず其の時代の精神として一般の人が信じて居たのである。それで段々と佛菩薩が日本の國に生れ變つて、さうして天照大神も八幡大菩薩も日蓮上人も上行菩薩の生れ變りであるといふ風に考へたのである。上人自身もかく信じて居られたやうであります。

斯ういふことに就いて之を迷信だと一概にいうて仕舞ふことが出来やうか。私はさうで無いと思ふ。併し此の通りに今私も信じて居るか云ふに、私は其の通りの信仰は有して居らぬのである。併ながら之れを一概に全く否定することは出来ないと思ふ。佛祖統紀の中に斯ういふことがある。それは「本化菩薩者、在子下方空中淨土深重佛勅鑑教機時國教法流布前後不休廢」といふのである。私は上行菩薩といふことも深く研究せぬ故、よく分りませぬけれども、私が之を解釋すると今日の學說から斯ういふ風に言へるのである。今日の學說はどうかと言ふと、私の此の身體は私のものである、思想も亦私のものであると思ふけれども、實は數十年數百年數千年前の祖先の細胞といふものが私に傳はつて現はれて來たので、私が現に唯今話しつゝあることも、實は數百年數千年前の我が祖先の思想から涵養されてそれが現はれて來たのである。今日の學說、殊に私の研究して居る兒童

心理學に依つて見ると、兒童も隔世遺傳によつて種々の發展をなして居るのである。即ち原人時代の有様が子供に傳はつて子供の發達過程中にいろいろと人類の歴史がくりかへされるのである。人類一般に文明が進むに従つて色々のことが分つて來ると同じ様に、兒童が年を取るに従つて色々の複雑なる思想が出て來るのです。中にも天才の如きは最も都合好く遺傳が出て來たものであります。上行菩薩は即ち天才に該當すると思ひます。併し是れは唯だ私の學問上の臆説でたゞ諸君の參考に供するに過ぎません。又佛勅といふのは社會の大勢力である。此の社會の勢力といふものが必要に應じて天才を發現せしめるのである。丁度其頃日本は三類の法敵が盛に起り天才の上行菩薩を要する時であつた。そこで上人が現はれて來られたのである。斯う考へて見ると、實に今日の學術上から見ても面白い説明であると思ひます。

併しかういふことを言ふと學問上でどうして釋迦が再び現はれたとか、何菩薩が再び現はれたとかいふことが言はれるかといふ人がありませうが、是れは信仰問題になる。自分の言行が丁度上行菩薩の言行と一致するならば、自分と彼と同一であると自分が堅く信じ、自分がさう思つたので、其の以上どうしやうも無い。かういふことは自分が信じ自分が判斷するより外は無い。諸君世の中に同一といふものがありますか、全く同じといふことがありませんか。學問上から言ふと決して世の中に同じといふことは無い譯である。併ながら最も同じに近いものは我である。十年前の我も今日の我も二十年前の我も今日の我も全く同じといふことは無い。併し我はいくら考へても前の我も後の我も同じであると思ふより外はない。之を人格同一というて古來やかましい問題になつて居る。之と同じやうに我が爲す所、我が考へる所、我が遭遇する所が、悉く昔現はれた所の菩薩のそれ

と同一であるといふことを自分が深く信じたならば、即ち我は誰の垂迹である、我は誰の再生であるといふことを信せざるを得ない。併ながら此のことは信仰の問題でありまして學術上證明すべきものではありませぬから、私は唯それだけに止めて置きます。併し此のことを以て一概に妄信である、迷信であるとは言はれぬと思ひます。上人の如き人があの頃日本に生れたといふことは決して偶然では無い。是れは社會發達の上から考へても生れざるを得ぬ時である。即ち前に申した通り上人が生誕せられる四十八年前には源空が念佛宗を開き、二十年前には建仁寺の榮西禪師が禪宗を弘め、十一年前には俊務が律宗を弘め、又生誕の三年前には親鸞が淨土真宗を開いたといふ風に、續々と色々の佛教宗門が開け諸宗が活動して居た時である。其の時に當つて上人の如き人が世に出られたといふことは決して偶然では無いと思ひます。

それから又上人の説かれた天災佛罰の説は之を牽強附會と言ふものが多い。即ち洪水とか旱魃とか若くは饑饉とかいふことは自然の作用であつて、人力では如何ともすべからざるものである。之を人心の如何に關係するが如くに説くのは全く迷信であると言ひますが、是れも一概に言ふことは出来ません。少し科學的に學問をした人には分ることです。殊に自然を學んだ人は決して一概に否定せぬであらうと思ひます。總て宗教には奇蹟といふものがある、併し其のことは全く學問上少しも説明の出來得ぬことでは無い。先刻お話しましたゲーテの「ファウスト」の中に斯ういふことを言うて居る。それは「奇蹟は信仰の最愛兒である」Das Wunder ist den glaubens liebsten kind. といふのです。是れは實に格言であつて、實は此社會に於て奇蹟は時々刻々ある。私の如き何にも是れまで宗教に心を寄せなかつた者が敢然として茲に諸君に向つて話が出来るのも是れは一の奇蹟である。此所に斯うやつ

て花が咲いて居る。此の花の咲くといふのも一の奇蹟である。私共が氣を付けて見ると天下の事悉く奇蹟ならざるは無く皆な不思議である。それで奇蹟が現はれぬといふのは自分が其の事に心を寄せぬからで、信仰を厚うしたならばいくらも不思議が現はれるのである。たゞ氣が付かぬ故何もかも其の儘に過して仕舞ふのであります。

それゆゑ宗教に就いて書いてある奇蹟が悉く虚とは言へません。假令眞であつても自分に氣が付かぬ故虚であるが如くに考へるのであります。何故私が今の洪水が出るとか、饑饉があるとか、其の他天災地變を以て人事に關係あるやうなことを説くかと言ふに、確かに斯ういふ天災地變の幾分といふものは人の心に信仰の無い、人の心が腐つて居る人の心が正法に向はないといふ所から來るのである。山の木を無茶苦茶に伐つて平氣で居ると雨が降つた時に山がそれを保つことが出來ぬ故直ぐに土砂を流し崩すの

である。山が崩れると川が埋り川が埋ればそこから水が汎濫せざるを得ぬ譯です。つまり人間の罪惡の爲め、即ち人間の持つべき私徳公徳を重んじて我が爲すべきことを充分務めて行かぬ故其のやうなことが起るのであります。饑饉でもさうである。東北の饑饉は一には國民が懶惰であるからです。私は東北へ往つて驚いたことがある。或る部分の人民は何でも食べる物の有る内は何にもせず遊んで居る。食べ物が無くなつても腹が減つてもひもじうない、と仙臺萩もどきで出來るだけ耐へて臥て居る。それ故饑饉が來るので、つまり横着の結果です。現に或縣へ私が往つた所が、其所の富豪は朝九時前に往くと、まだ御休みでございませと言つて決して會はない。何故かと言ふと、金持が九時前に起るのは恥だとしてあるからで、金持は成るだけ寢坊をするのを名譽として起きて居つても會はぬのであるといふことです。そんな横着をするから饑饉が起るのです。其の他流行病

が各自の不攝生不謹慎から來るといふことはいふまでもないことであります。それゆゑ天災地變の總べてがそれを以て説明することは出來ぬけれども或程度までは人事に關することが學術上より説明されるのであります。此の點に於て上人が斯ういふことを言はれたのは決して荒誕無稽では無い。それから地震があるとか彗星が出るとか、斯ういふことは今日の學說よりは到底人事との關係を説明することは出來ませぬ。是れは其の時の學問上さう信じて居つたので、決して上人が人を集めて胡魔化された譯では無い。是等の點より見ると吾々が今日奇怪のやうに思ふ説も充分に研究してその信念を確かめ一旦世の中に打つて出た以上はこんなことの爲めに信仰の基礎を動かすやうなことがあつてはなりません。

又人が世に立つには自信が最も必要である。我自らといふものを信じなければならぬ。我は何をすべきものであるかといふことは十七八歳の時に

起る疑問である。それが一旦決定せられて段々進んで往くに從つて自信を固めるのである。上人の自信は實に堅かつた。是れも今私が言ふまでも無いことであります。上人の自信といふものは初めから強かつたのでありますけれども、私の見る所に由ると佐渡以後殊に強くなれたことを發見する。上人は初めから經文を信仰せられた。佛の説かれた經文に就いて一點の疑を容れられない。従つて上行菩薩の出現に就いては充分信じて居られたけれども、併し初めの間は上行菩薩として何人が出て來るであらうかと思つて居られたやうであります。然るに自ら法華經を弘められるに當り其の起つて來る事柄が着々經文に書いてある上行菩薩出現の豫言と一致して居る。そこで終に一大自覺に到達せられたのであると思ひます。

其の證據には佐渡へ御出でになつてからの御書中に「日蓮と言へる者は去ぬる文永八年九月十二日龍の口にて頭刎られ畢んぬ。」といふことが書い

てある。即ち過去の我はそれで無くなつて仕舞つてそれから復活の我である。復活された日蓮上人はどういふことを言うて居られるか。是れも諸君がよく知つて居られるから長く讀む必要は無いと思ひます。私は實に宗教家たる者は須らくかゝる信念あるべしと思ふのである。南條七郎に宛てた御書に、身延の山の淋しいことを説かれ偈で「かゝるいと心細き幽窟なれども教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にて相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處なり。舌の上は轉法輪の處、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住處なればいかでか靈山淨土に劣るべき」と言うて居られます。實に莊嚴此上ない宣言であります。又開目抄には斯ういふことが言うてある。「大願を立てん日本國の位をゆづらん法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頭を刎ねん念佛申さずんばなんごの大難出來すとも智

者に我義やぶられずば用じとなり。其外の大難風の前の塵なるべし。我日本本の柱とやらん我日本の眼目とやらん。我日本の大船とやらん等と誓ひし願やぶる可らず。」實に上人は斯ういふ偉大の自信を有つて居られた。而も此の信仰は決して妄信では無い。「智者に我義破られずば」といはれた以上は若し之に勝る真理あらば喜んで之に従ふといふことを包含して居る。之を以て上人の信念が立派なる理性的のものであつたといふことが分る。又之も常に人の讀むことでありますが、種々御振舞抄に「僅の小島の主等がおどさんに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき佛の御使と名乗ながらおくせんことは無下の人々なり。」とあります。實に是れは壯快の語であつて、總て一の主義を有して世に立つ者は何人も此の精神が無くてはならぬ。我は國家に屬して居るものであるから、我が肉體は國法によつて國家の執權者に隨ふけれども、我が精神は必ずしも之に従はぬ。我が精神は却つてあ

らゆる者を同化せしめて往くのである。我は佛の使である。我は即ち佛である。此の考を以て宗教家は立つて往かねばならぬ。學者は學者で眞理に依つて往くのであつて、眞理を以つてしては何人にも下らぬといふ精神を有つて居らねばならぬ。斯の如き精神を以て勇ましい奮闘的生活を遂げられたのは我が日本の歴史有て以來上人の外には殆ど見ることは出来ぬと思ふ。私は實に故高山樗牛と共に我が祖先に斯の如き精神の強い勇猛なる意思を有つて居た偉人を見出したのは實に我々の誇とするに足ると思ひます。次には上人の識見に就いて述べたいと思ひます。すべて自信の有る人には無論識見がある。之に就いて私の感じたことを御話しますが、上人の識見の高いといふことは、あの四大難即ち三十九歳にして名越松葉谷の難、四十歳にして伊豆流竄、四十三歳にして小松原の難、五十歳にして龍口の難及び佐渡流竄といふやうに度々難に遇はれて毫も屈撓されぬといふこと

にあるのでは無い。是れは或は上人でなくとも善くすることが出来るかも知れぬ。何故といふに自分が敵と奮闘して往くといふことは、馬鹿であるか或は意氣地の無い者で無ければ、誰でも必ずすることである。併し私の最も敬服するのは、あのくらゐ困難苦勞をして幾たびか死に瀕し否死に勝る苦みをされて、それで流石剛腹なる時宗も閉口して平左衛門頼綱を通じて、佐渡より歸られた時に愛染堂に一千町の田地を添へて寄進するからどうか四箇格言を止めて國家の爲めに妙法を弘めて貰ひたいといふ事を言つて來たときに毅然として之を刎付けられた所であらうと思ふのであります。諸君、之を今日の學者、或は今日の宗教者に比して見たらどうでありますか。實に今日の學者或は宗教家は官職に汲々として權威に恐れ、或は國家に媚び時代に阿ねる者が比々皆然りであると私は考へる。斯ういふことでは到底眞の宗教眞の學問は發揮されるものではない。上人がああ長い

間艱難苦勞せられて、やうやく妙法弘通の承認を得、執權より寄進さへもせうどの申込があつたのである故、若し普通の人間であつたならば恐らくはもう年も取つて身體も弱つて居るし、晩年を樂に送る爲めに此申込に従うたであらうと思ひます。それを毅然として排斥したといふことは、實に私の景慕に堪へぬ所であります。總て人が事を爲して往く上に最も害になるのは「バニチー」である。官位に動かされ名譽に眩まされて目的を誤るといふことであります。「日蓮幼若なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし天照大神八幡宮も頭を傾むけ手を合せて地に伏し給ふ可き事なり」此の見識が常に無くてはならぬと思ふのであります。是れから圓熟期の上人の御話を致す積りでありましたが、もう時間が參つたさうであります。誠に遺憾であります。他日再び機會がありましたならば、私は今日に勝つた研究を致しまして多少諸君の御參考になる話をしやうと思ひます。

日蓮上人の人格

滿場の諸君、私は今回京都の日蓮主義講習會の招待を受けまして、二日間お話を致しまして、只今、丁度、歸りがけであります。今回當地に於て天晴會の講演を開くからどうか寄つて呉れるやうにといふ御依頼でありましたから、歡んで參りました次第であります。私共同志が段々殖わて來るのは、誠に喜ぶべき現象で、今回の御依頼は否まれぬ事でありますから、喜んで此處へ出ました次第であります。

私の演題は、此處に掲げてありますやうに、「日蓮上人の人格」といふ題であります。天晴會といふのは、只今幹事の開會の辭でもお聞でありました如く、日蓮聖人の人格を中心として、これを讃仰し、これを研究して行

く團體であります。それ故に、日蓮上人の事に就て私の最近の感想をお話するといふ事は、私が始めて諸君にお話するには最も適當であらうと思ひます。さて此の題を出しました。どうか暫く御清聴を煩はしたいと思ひます。

元來、人間といふ者は、非常に保守的の方面と、それから又進取的の方面即ち新しい者へ新しい者へと推し移つて行くといふ、此の二つの衝突した方面がある。一體、日本人は長い間、随分、保守的思想に束縛されて居まして、どうも日本人ほど偉い者はないと思つて、夷狄人種といつて西洋人を賤しんで居た時代もあつた。保守的の考が強い時には、今日のやうな新しい者はないやうに思うて居ました。所が一たび自分より偉い者があるといふ事が解ると、それが極端になつて了ふ。即ち此の數年前までの我が國の有様はどうかといふと、全く外國崇拜であつて、西洋人といへば直に耳を傾ける。今日に於ても、教育界或は經濟界には未だその風が

残つて居まして、これは西洋人の説であるといふと、是非善惡に拘らず耳を傾けて聴くが、日本人の説であるといふと、善い説であつても善く思はぬといふ傾向があります。その證據には著書を御覽になつても解ります。何れの著書でも、日本の學者の説を引いて参考にして居る著書は殆んどない。日本に立派な學者は幾らも居るけれども、その學者の説を引かずして、獨逸とか亞米利加とかの第三流第四流、甚だしきは第五流の學者の名を出して、著書を飾つて居るのである。ニツケル氏曰くとか、或はラムブ博士の説に曰くとかいふやうな事が書いてあると、感心をして居る。これは可笑しい状態である。併しこれは別に咎めるにも及ばぬのである。人といふ者は大打撃を受けると、自覺を失つて我を忘れて了ふのである。丁度、山中に住んだ者が東京の銀座の街道に立つて、我を忘れて茫然とする如く、恰かもそれと同じやうな状態に陥つて居た。然るに何時までも我が國民も

自覺せずには居ない。日清、日露の二大戦役の結果、我が國の實力が世界から認められて來て、我が國の昔の英雄豪傑といふ者が段々研究されるやうになつて來た。今までは一向氣が付かなかつたが、偉大なる思想は昔の宗教家の力に藉らなければならぬといふ事が解つて來た。

然らば、その最も著しき日本の宗教家は誰であるかといふと、それは日蓮上人その人である。日蓮上人が今まではどういふ風に世の中から認められて居たかといふと、信仰して居る人は別問題であるが、一般の人は、日蓮上人といふ坊さんは亂暴な坊さんであると思つて居ました。これに就て、私は何時もいふのでありますが、上人に對する世人の批評は色々ありまして、中には、上人を怪僧である怪しい事をする坊さんであるといふ人もあるし、又傑僧であるといふ風に見て居る人もあります。斯様な有様でありまして、日蓮上人といへば殘忍酷薄な人であつて、少しもゆつたりした所

のない人である、温い所のない人であるといつて居る人が多いのでありますが、實は私も始はさう思つて居たのでありまして、眞正に日蓮上人といふ人はどういふ人であるかといふ事を知らなかつたが、或る動機からして、私は日蓮上人の遺文録を読んで非常に感に打たれたのであります。それで私が此の日蓮上人を鑽仰するに至つたのは最近の事でありまして、教育界に居られる諸君は或は私を御承知かも知れませぬが、私は本來、心理學を専門として居る所のものであります。それで私は日蓮上人を心理學的に解剖して、未だ此の世の中に餘り現はれて居ない點に於て非常に偉大なる敬慕すべき感奮すべき、今日の思想界に於て、又今後日本の精神的の一種の典型として、立派な人格を備へて居る人であるといふ事を認むるに至つたのである。それ故に今晚は私の専致して居る學問の方面から、私が上人を見ました極大略のお話を致しまして、諸君がこれに就て多少の興味をお持ち

になり多少の感じをお起しになり、猶ほ進んで上人の典型に就て御研究になつたら、諸君の修養上に於て、或は信仰上に於て、若くは思想上に於て、又は諸君の仕事の上に於て、得る所が少くならうと思ひます。

一體、人間といふ者は一生涯の上に大體段落がある者である。無論、人間の生命は續いて居る者であるが、その續いて居る中に自然と三大時期が描かれる者である。これが著しい者と著しくない者とある。日蓮上人の如きは最も著しき模範的の三大時期が劃然として描かれて居る。三大時期といふのは、小兒の時、大人の時、それから老年の時である。斯様に人間には自然に少年、壯年、老年、との三大時期がある。これを働の上からいうて見ると、小兒の時代といふのは修養をする時である。社會へ出る準備をする時代である。青年時代から精神なり學問なりの方面を修養して、自覺といふ者を得るのである。その間に自覺を得ない者は仕方がない。兎に角、

修養時期に於ては、主として自覺を得なければならぬ。その次は活動の時期である。壯年の時代には働を現はさなければならぬのである。その働を現はして、さうして年を取つて來ると、働が出来ぬから、その働いた跡を纏めてこれを自分の子孫に遺し、天下後世に傳へるといふのが老年の時期である。この三大時期が日蓮聖人に於ては劃然と描かれて居るのであります。

それで先づ修養の時期に必要な事柄をお話して行きますが、人間の修養の時期にはどういふ事が必要であるかといふと、それは智慧を得るといふ事が主なる者である。無論、感情も養はなければならぬが、修養の時期に於ては物を知るといふ事が第一である。天地萬物を自分の心の中へ入れて了つて、「眼を開けば、我、天地の中にあり、眼を閉れば、天地、我が中にあり」といふ風に、天地の萬有を皆自分の心の中に入れて行くのが、修養

期の特色である。それをやつて行く中に、自覚といふ者が出来て来る。成程、俺には此ういふ天職がある、俺の責任はこれである、人生はこれであるから、此れに向つて進まなければならぬといふ事が、明かになつて来る。これが自覚の時である。自ら覺る時である。これは日蓮上人計りでなく、昔の宗教家にも其等の事が一致して居る。釋迦は十六から十七の間に於て自覺が起つた。非常な苦心を以て煩悶を堪へて、さうして研究をされた結果、二十九にして愈出家し、三十五にして成道をされた。ルーナルは二十二の時に自覺が起つて、三十四にして愈自分の信仰を堅める事となつた。孔子は、十五にして學に志すといふのが自覺をした時であつて、三十にして立つといふのが、即ち成道をされた時であります。日蓮上人はさうであるかといふと、上人は十二の年から學問をされて、十六から十八までの間に於て自覺をされて、非常な苦心をし色々な難行苦行をして、所有勉強を

し研究をされて、三十二にして愈々道を得られたのである。それで、釋迦は三十五であるし、日上聖人は三十二であるし、ルーナルは三十四で成道をした。少々は違ふが、大抵は三十二三から四五までの間に、世の中に立つて働く上に就て、確信が起つて来るのである。

それで、その自覺が起り、尋いで成道するに至るまでの形式は、どういふ形式で進んで行くかといふと、それは丁度、ピラミッドのやうな修養を累ねて行かなければならぬ。ピラミッドのやうな修養といふのは、根底を深くして、出来るだけの範圍に自分の研究を進めて、何もかも研究をして纏りをつけ、最後の一點に於て目的を立て、その點に於て世の中に打つて出るといふ事が、これが世の中に立つて行く大事な形式である。學問をするのでも、我は歴史家になるといつて、歴史ばかり讀んでも仕方がない。又俺は地理學者になるといつて、地理の書ばかりを讀んで居ても仕方がな

い。商人でも、矢張り、その通りであります。それであるから、成るべく見解を廣くし、博く學んで、さうしてその力を最後の歸著點たる自分の信仰なり、又は自分の職業なり、世に立つ所の者に集めて行くのであります。これが非常に大切な事でありますが、日蓮上人に於ては、これが誠に立派に出来て居るのであります。昔からの學者は皆ピラミッドのやうな修養をやつて居る。然るに、我國今日の學者の状態はどうかといふと、多くの學者は僅かに中等學校位の教師をして居て、専門の學者として世に立つには、まだ、廣く研究しなければならぬにも拘らず、中等學校の先生になると、「私は歴史が専門であるから宗教などの事は聴かぬでも可い。私は數學が専門であるから佛教杯いふやうな者は研究せずとも可い」といふやうに、専門家を氣取つて、廣い意味の修養を怠る者が澤山ある。此ういふ風では不可のであります。諸君はそんな事では、とても日蓮主義になる

事は出来ないのであります。西洋の學者などは、日蓮聖人を知らないでも、日蓮主義に由つて修養して居る者がある。何人といへども、カントの名を知らない者はない。カントは獨逸近世の哲學者であります。哲學ばかりやつて居たかといふと、さうでなく、少くも天文学、地理學に通じて居た。その他、數學も教へて居た。或は獨逸のゲーテといふ人は、詩人であり又哲學者であるが何もかもやつて居た。自分は人生を歌ひ、さうして立派な哲學思想を人に與へる事を以て、本領として居る人でありながら、又一方に於ては政治家でもあり、又礦物學者でもあり、又劇を作る人でもあるといふやうに、色々な事をつつた人である。又グラッドストーンといふ人も有名な政治家であります。希臘の古文學をも講じた人である。又現在生きて居る學者でフーレルといふ人がある。これは瑞西の人であります。此の人は波の研究をやつて居る人でありまして、又催眠術もやる人であり、

さうして、瑞西の病院の院長をもして居る人である。さういふやうにフールは醫者もやれば催眠術もやり、法學博士でもあり、又繪の研究もして居る人であるが、これは容易のことではない。又最近には、男女の性の事をも研究して居ります。さういふやうに、専門家でありましたも種々の方面に注意をして居るのであります。是の如く、西洋の有名な學者は、所有方面に就て研究をして居るが、日本の今日の學者は、何をする人でも、自分が直接に入用の事の外は、何事にも耳を傾けぬといふ人が多い。

日蓮上人といふ人は、法華經の外には何も知らない頑固の人間であると思つて居る者があるが、豈に圖らんや、日蓮上人の修養は、非常に廣い範圍に涉つて居るのであつて、今日から見ると、さうして斯様な事が出来たかと怪しまれる程、廣い範圍に於て研究を盡されました、これが眞理であるといふ事を認めて、三十二の年に始めて南無妙法蓮華經といふ事を唱へ

られたのであります。その詳しい事は傳記をお讀みになれば解ります。十二の年に寺へ這入られました、道善といふ師匠に就て佛教を習はれました。この道善といふのは眞言の坊さんである。此の人に就て學問をして居られました、十九の年にさうも疑問が起つて堪らない。即ち自覺の前に煩悶されたのであります。眞の自覺といふ者は、人生を疑ひ、天職に就て考へる。さういふ事から起つて來る煩悶である。で、日蓮聖人は師匠の道善に向つて、「どうも佛教には色々な事が説いてあつて、それが眞理であるか解らない。一代藏經といふ澤山の經があつて、それが主腦か解らない」といふので、この事を道善に尋ねられました、道善の答に満足が出来ないので、そこで——今でもありますが、——あの清澄の虚空藏菩薩に願をかけて、どうぞ此の疑問を解決する所の智慧を與へ給へと祈られました。さうして終には吐血される程、熱烈に眞理を求められました。血を吐いた

といへば、ルートルも血を吐いたといふ事ではありますが兎に角、此ういふ工合にして、遂に一代藏經を閲して居られる間に、一代藏經といふ經文がある。その經の中に眞理の曙光を認められたのである。これが眞理ではあるまいかといふ事を認められたのであります。大概の者は、これに違ひないというて、直に吹聴をしたがる者であるが、日蓮上人は所謂大器晩成で、慎重な態度を執つて、少しも此の事を口外されなかつた。二十二年の間といふ者は、種々様々に困難を累ねて、或は鎌倉に行つて、浄土宗の坊さんに就て研究をし、或は律の坊さんに就て研究をし、或は叡山に登つて天台を學び、又はその當時の所有偉い坊さんに就て問答をし質問をして、禪の方では圓爾といふ人に就て研究をし、或は道元禪師に就て研究をし、或は奈良の東大寺に行つて名僧に道を尋ね、或は高野山へ行つて研究し、或は又冷泉爲家^ニに就て和歌を研究してその奥義を極め、その他、何か自分

の研究になりさうな所は、手を盡して求められたのである。さうして、その結果、どうしても自分の信じて居る眞理以上に、外に眞理はないといふ事が解つて來て、三十一にして叡山に歸りて再び天台の事を研究し、遂に決心をして三十二の時^ニに始めて宗門を開かれたのである。さうして、日蓮上人の二十二年間の修養といふ者は、佛教は勿論、儒教又は神道等に就ても研究をし、その他、文を學び、書を學び、書を學び、彫刻もやられたし、外國語までも學ばれた。梵字であるとか、悉曇であるとか、日本に傳つて居る印度の文字を學ばれた。ある人は、日蓮上人が、南無といふ梵字と妙法蓮華經といふ譯字とを接合させたのは、梵語の素養がなかつたからであらうというて居ますが、その事に就ては遺文録に詳しく書いてあります。是の如くにして、所有研究に研究を累ねて、その當時の眞理を研究し盡くして、これ以上はないといふ所までやられたのである。

これは我々が學問をする上に於ても、又實業家が實業に従事する上に於ても、模範とせなければならぬ事であります。何でも機會があつたら、開いても置かうし、讀んでも置かうし、接觸もしやうといふ方針で、幾らでも、その事に就て、例を擧げて説明をするといふやうにしなければ不可ぬのであります。日蓮上人もその通り、その當時の所有事柄を調べてやられたのである。旅籠屋でもその通りでありまして、昔の儘の體裁でやつて居ましては、とても不可ぬのであつて、世の進歩に伴れて改良をした所の旅籠屋を立てなければなりません。商賣をするにもその通りでありまして、日蓮上人は善い所の者を參考として、それに由つて眞理を求められ、善い者を求めて、それに由つて改良を計られたのであります。今日博覽會を開設するといふのも、或は歐米を視察するといふのも、つまりそれでありまして、日蓮上人が苦心して眞理を求められた精神を以て、世に立たなければ

ば、何をする事も出来ないのであります。これを以て見ても日蓮聖人は立派な典型を備へた人であるといふ事が解るのであります。

それで、日蓮上人のやうな人は、決して一宗一派の人が専有すべきものならず、假令、基督教を信じて居る人でも、眞宗を信仰して居る人でも、又假令上人に罵倒されて、憎らしいと思ふ人にしても、上人のやられた方法に由らなければ、決して成功する事は出来ないのであります、されば上人其の人の如き偉人は、決して一宗一派の専有のものと思せずして、日本の偉人、世界の偉人として鑽仰し上人の執られた方法に由りて進んで行くやうにしなければならぬのであります。

青年時代の修養期はさういふ順序でありましたが、さて壯年時代の活動期に於て、ごういふ事をされたかといふと、これは私が此處に幾ら強い言葉で以て言ひ顯はしましても、上人のこの熱烈なる、この強い所の信仰を諸

君に傳へる事は出来ないのであります。これは諸君が上人の實行せられた事蹟に就て御覽になれば、必ず、情のある人、恕のある人、力のある人である事が解るのであります。公平に日蓮聖人を見るときいふと、實に活動的であつて、さうして強い力を有つて居られる。如何なる者にも殆んど譬へ方のない程、強い意志を有つてやられた人である。要するに活動期に於ける主なる要素は意志である、修養期は智慧であるが、活動期は意志であります。イシといつても庭先にある石ではない。これは精神の働であります。此意志の強いのが上人の特色であります。即ち自分の信する所は何所までもやり通す、自分が是と認めた所は、最後まで自分の意志を以て仕遂げるといふのが上人の上人たる所であります。即ち上人は一天四海皆歸妙法の理想を以て人間を救はうとされたのであります。法華經が唯一の眞理であると信じ、之に由つて世界の者を救はうといふ理想で、この世の中に立

たれたのであります。假令、上人の信仰に入らぬ人でも、人は皆自分の意志を以て世界を化して行くといふ心懸を有たなければならぬのであります。それで、教育家であれば教育を以て世界萬人を化さうといふ意志を以てやらなければならず、又商賣人にしてもその通りで、僅かな得意先があるからとて、それに満足して早く隠居をして樂がしたいといふやうな考では不可ぬのであつて、その仕事、その主義に由つて、天下を化して行くといふ決心がなければならぬのである。それ故に、日蓮上人は天下萬民の爲に、この一天四海皆歸妙法の眞理を傳へたいといふ考を以て、世の中に臨まれたのであります。今日まで日本の佛教の中には宗旨が幾つも分れて居るが、これ等の宗旨の中には法華經を奉じて居る宗旨もあるけれども、惜い事は、眞正の意味の法華經が廣まつて居ない。尤も重きを法華經に置かれて居ないのであるから、日本に於て眞正の意味の法華經が發達し、これに由

つて多くの人が救はれなければならぬといふ事は、夙に日蓮上人が遺文録に於て言はれて居るのであります。印度に起つた佛教の中の法華經が、支那に渡り日本に渡つて、さうして今度は段々西洋に渡つて、世界を統一しなければならぬといふ事を、日蓮上人は言はれたのであります。これが即ち我々の天職であります。始めて聞く人は詰らぬ事をいふと思ふでありませうが、私は、日本國民として是非この心懸を有たなければならぬと思ふのであります。私は常に精神的の帝國主義といふ事を唱へて居るのであります。六百年前に於て日蓮聖人が既にこの事を唱へられたのを見ては、我々は上に上人に感謝しなければならぬのであります。

然らば、日蓮上人が法華經に由つて國を治め民を化して行かうといふ方針を採られたのは、何であるかといふと、上人の考は單に日蓮宗といふ様な狭い所から見られず、又これを禪宗とか真宗とかのやうに不統一の點か

らいふのでなくして、法華經は宇宙百般の事を包含して居る所の眞理であるを認められて、この主義を傳へ、この主義に由つて日本を精神的に教化して行くのが即ち我が日本の天職であるといふ事を六百餘年前に示されたのであります。諸君は既にこれを悟つて御實行になつて居るだらうと思ふのであります。それでありますから、日蓮上人の一天四海皆歸妙法といふ統一佛教の主義は、宛かも文明の徑路と同じき者であります。文明は何處から起つたのかといふと、亞細亞の西部に起つて、一方は東に傳はつて、印度に行き、西藏に行き、支那に行き、日本に來たのであるが、又一方は西に傳はつて、希臘に行き、羅馬に行き、歐羅巴各國に行き、コロンブスの船に由りて亞米利加に行き、さうして日本へやつて來た。別れてから絶えて久しく會はなかつた東洋の文明と西洋の文明とが、互に握手するやうになつたのであります。諸君の中には、今日でも洋服を着て、下駄をはい

たり草履をはいたりして居る人がありませう。これは東洋の文明と西洋の文明とが一致した證據であります。或は家でも、東洋風と西洋風との間の兒のやうな家があるのは、つまり東洋風と西洋風とが調和されて居るからであります。是の如く常に物質上に於てのみならず、精神上に於ても亦さうであります。學生諸君なり、或は學校の先生達の頭の中にも、東洋の考や西洋の考や色々な考が這入つて居る。諸君の頭の中には釋迦も這入つて居れば孔子も這入つて居るし、又ヘーゲルも這入つて居るといふ譯である。そうして、何れの國民でも、日本人ほど東洋なり西洋なり色々な國の文明が一緒になつて、色々な形に由つて形造られて居る國民はありません。であるからして、日本國民は、日本を始め世界各國の文明を統一して、さうして支那なり印度なりを指導感化して行つて、新しい善良なる國としなければならぬのでありますが、日蓮上人は、法華經に由つて、この目的を達

しなければならぬといはれたのであります。「天與取らざれば却つて咎を得」といふ事があります如く、この日蓮主義を心に感得し、これに向つて猛進するのは天與である。徒らに西洋の事に心酔するやうでは駄目である。今日では西洋人の中になか／＼盛んに是等の事を研究して居る人があるのであります。その他の事に致しましても、西洋人は色々日本を研究して居るのであります。日本文典の中には、西洋人に由つて拵へられた日本文典もあるのであります。即ち日本の文典を、科學的に説明したのは、チャンパーレンといふ英吉人であります。又日本畫の特色を世界に紹介して呉れたのは、亞米利加のフェノロサー博士であります。猶ほ又、諸君は「アイヌ」といふ人種が日本に居る事を御承知でせう。世界の中でも、日本以外にはあゝいふ者は居ない。然るに「アイヌ」の言語を研究して辭書を拵へた人はパチエラーといふ英吉利の宣教師である。その他、人類學を研究した

人は、日本では坪井博士であります。その始めは亞米利加のモールズといふ人であります。さういふ風に、日本の物は善い者であるといふ事を、西洋人から教へられなければならぬといふ状態になつて居る。その如く今より六百餘年前に日蓮上人は、日本人は法華經といふ大乘佛敎に由つて教化さるべき國民である。これに由つて天下を治めなければ不可ぬといつて、不惜身命で奮闘に奮闘を累ねて終つた人であります。此ういふ事を考へて見ると、どんな日蓮嫌ひの者にしても、日本國民として眞に我々に天職を教へられた人であるといふ事が解るのであります。

現在の日本の状態といふ者は、段々自覺が起つて來まして、日本人が日本の研究をするやうになつて來て居るのであります。中には、この偉大なる日本を根底から破壊しやうといふやうな危険の思想もある。これは情ない事であります。私共は忠君愛國とか、親に孝行とかいふやうな事を歴

制的にいふのは嫌ひでありまして、何も殊更に忠君愛國とか、君に忠とか、親に孝とかいふ事を歴制的にいはなくとも、日蓮上人のいはれたやうに、天職といふ上からいふと、忠君愛國も親に孝行も、喜んで出來るのであります。これが日本人の天職である。日本人は如何にもして世界の文明を統一しやうといふ考を以て、やつて行かなければならぬのであります。それがやがて活きた法華經になつて來るのであります。さう申しますと、法華經といふ者は妙な事を教へるといふ人があるかも知れませぬが、妙と申しましても何も歸天齋正一がやるやうな妙ではない。實に法華經には善い所があるのである。それに由つてやつて行けば、佛敎を統一して行く事が出来るのであります。日蓮上人は此の信仰を顯はすのに、先にいうたやうな非常に熱烈な意志を以てせられたのであります。上人の遺された文を讀んで如何に上人が眞正な意味の愛國者であり又意志の強い人であつたかとい

ふ事が想像出来るのは、遺文録の中の開目鈔であります。諸君がこれをお読みになれば、必ず骨鳴り肉動くの感が起つて來るであります。それからもう一つ種々御振舞鈔といふのがあります。これをお読みになれば、私の今いうた事が能くお解りになります。

開目鈔の中に「大願を立てん、日本國の位を譲らん法華經を捨て、觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我が義破られずば用ゐじとなり。その外の大難風の前の塵なるべし。我、日本の柱とやらん、我、日本の眼目とやらん、我、日本の大船とやらん等と誓ひし願、破るべからず」というて居られます。どうです諸君、假令、天子の位を譲ると云うて來ても、自分の信仰は捨てない。假令、お前の父母の頸を刎ねるといっても、決して此の信仰捨てない。併しながら、無茶苦茶にさういふのかといふと、決してさう

はない。智者の爲に我が義が破らるれば、自分はその説に随ふのである。自分の信仰が間違ひであると解つたならば、何時でも自分の信仰を捨て、眞理に随はうといふ事を書かれてある。大願を立てんといはれたその大願は、どういふ大願であるかといふと、「我、日本の柱とやらん、我、日本の眼目とやらん、我、日本の大船とやらん」といふのであります。此ういふ事は大言壯語のやうでありますが、これはお互に、此ういふ考を以て日本の爲に働かなければならぬのであります。女でも、男でも、日本の柱とやらん、日本の眼目とやらん、日本の大船とやらんといふ考を以て、自分の天職を果して行かなければならぬのであります。日蓮上人は何が爲に大難を侵して法華經を説かれたかといふと、此の三大誓願を成す爲に説かれたのであります。

諸君も定めしお聞及びであります。日蓮上人は龍の口に於て頸を切

りかけられた時も、又は伊豆の伊東に流されて、狙岩——潮が来れば潰つて了ふ海中の岩——の上に流された時も、泰然としてお経を誦んで居られたのであります。其處へ船守彌三郎といふ人が、これを見付けて行つて見ると、狙岩の上で一人の坊さんが泰然自若としてお経を誦んで居られるので、兎も角も私の船にお乗りなさいというて、自分の船にお乗せ申して歸つたのであります。日蓮聖人を助ける者は聖人と同罪であるといふ事になつて居るにも拘はらず、船守彌三郎は、上人の徳行に感じ、眞理を傳へる法華經の行者を助けなければならぬといふので、夫婦心を協せて、丁寧に上人を四十餘日の間、自分の家におかきまひ申上げたといふ事があります。又伊東朝高といふ大名は、始は聖人を殺し奉らんとした者であります。後には此の人も上人の御徳に感じて、歸依したといふやうな状態でありまして、眞理を以て國家と人生とを救はうといふ人は、諸天善

神の擁護を受けるから、何所へ行つても安全であつて、焼いて了はう、殺して了はうと思つた人が終には熱心なる信者になるといふ状態であります。佐渡へ流されてからも同じ事である。阿佛房といふ者が、始は上人を殺さうと思つて居たのですが、問答の結果、却つて其の考を翻へして、上人に衣服を差上げたり、飯を持つて來たりするやうになつた。斯様に、終には敵が皆上人に歸依するといふやうになつて來ました。上人はかゝる立派な信仰を有つて居られました故、決して何人にも恐れられぬ。上人は北條の事を何と云つて居られるかといふと、「小島の主等が威さんを恐れては、閻魔王の責をば如何にすべき、佛の御使と名乗りながら臆せんは無下の人々なり」といつて居られるのであります。實に壯快ではありませんか。自分は天下國家の爲に人を救はうといふ考を有つて居られるから、北條氏の如き僅かに日本の政治を執つて得々たる者を小島の主といはれたのであります。

我々が仕事をする上に於ても、立派な事をして置きさへすれば、上の人のいふ事を恐れるといふやうな事は要らぬのである。日蓮上人のやうな信念を有つてやつて行くなれば、この通りに強い心が出て来るのであります。上人は権利といふやうな事は説いて居られませぬが、今日の語でいふと善き意味の権利であります。上人はその権利を保持して如何に妨げる者があつても、之に屈せず何所までもやつて行かれたのであります。

是の如くにして、日蓮上人は目覺しく活動せられた結果、天下の政權を以てして、聖人の頸を刎ねる事も出来ず、しかも上人の蒙古來寇の豫言が的中して、果して蒙古から攻めて来たから、そこで上人を許して佐渡から呼び歸したのであります。日蓮上人は、この法華經を修行する者は諸天善神が助けるといふ事を信じて居られたから、佐渡から無事に歸つて来られたのであります。斯様な譯で、流石に頑冥なる北條も、一人の日蓮上人を

如何ともする事が出来なかつたのである。或る者は、日蓮上人は房州の小湊といふ所の漁夫の家に生れた旃陀羅の子である、即ち穢多の子であるといふのでありますが、穢多の子でも何でも構はぬ。一漁夫の子が天下を敵として戦つて、終に天下に打勝つたといふ事は、實に壯快である。是の如く二十二年の間、苦心せられた結果として、これに由つて世を救ふ事が出来ると思はれた上人の志といふ者は、どうしても奪ふ事が出来ない。假令、北條が肉體の日蓮上人を殺すとも、精神の日蓮といふ者は、どうしても殺す事は出来ない。これを見て取つた北條は、何といふたかといふと、仕方がない、お前のいふ事を聽いて宗門を弘通する事を許す。その代り、どうか念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊といふ事だけは止めて呉れ。さうすれば莊田十町をお前に上げて、大きな寺を建て、其處で宗門を弘める事を許すからといふのでありますが、日蓮聖人は、私のいふ事を全體にお用ひ

下さらぬならば、私は寺も田も要りませぬ。三度諫めて聽かれずんば、天下の法であるからして、私は隠退するというて、斷然、身延の山中に隠れて了はれたのであります。大概の人ならば、最後の天下の國主が、それだけ頭を下げて頼んだなら、宜しう御座いますといふ所であるが、日蓮上人はそんな事では節を屈せられぬのであります。世には五百や千の金の爲めに節を屈して、今までの志を捨て、他に趨る人があり、又僅かの金錢に目がくれて、それが爲に鐵窓の下に繋がるやうな人がありますが、さういふ人に比べたならばどうでありますか。日蓮上人は無位無官であつて、天下皆敵の中に立つて、終に佛菩薩と崇められ、大上人として人から渴仰される、やうになられたといふ事に就て、諸君にお勧めしたいと思ひますのは、我は何所其所の學校へ入學したいと思ふが、學資がないから入學が出来ぬといふやうな弱音を吐く人がありますが、日蓮上人の事を思ふと、そんな

事はいはれぬ筈である。又日蓮上人は判任官何等とか、或は奏任官何等、又は勳何等といふやうな辭令も何もない。無位無官の坊さんである。それで天下に打勝つて此れだけの事をなされたのであるから、私はこれが眞の先生であると思ふのであります。私は天下の誰にも頭を下げて助けて貰はぬ赤裸々の高島平三郎でありますが、悪い事は決してしない。自分が眞理と認めた所を以て眞理として、世の中に立つて居ますが、日蓮上人の如き偉大なる人格でありませぬから、上人のやうな立派な事は出来ませんが、それでもせめてどうか第二の日蓮とならん、第三の日蓮とならん、第四の日蓮とならん、第五の日蓮とならんと、我が上人を理想として、諸君と共に進んで行きたいと思ひます。

それで日蓮上人は、さういふ譯で天下に打勝たれたのであります。——
——もう九時でありますから詳しく申上げる事は出来ませぬが——

に角、日蓮宗は非常に國家的である。今までの宗教に國家の天職を結び着けた宗教といふ者はない。基督教は世界的であつて國家的でない。又佛教の中でも、日蓮宗以外の宗旨は同じく世界的であつて國家的のものではありません。所が日蓮上人は、自分の説く所の佛教の根底は、日本といふ國土と離れないといふ觀念から説かれたのであるから、日蓮宗は非常に國家的である。あの通り北條を逆賊と罵り、又源氏や平氏を二匹の犬と諍つて、天子の政權を奪ふ者は逆臣であるといふ口調を以て説かれて居る。日蓮上人の頭には真正に國家を思ふ心が常に離れぬ。それであるから、その説かれる所は、此の世の中は仕方がないから未來で往生をしたいといふやうな消極的の教でなくして、現代哲學でいふ所の積極的なる現象即實在といふ一元的哲學思想を、今より六百餘年前に鼓吹されたのである。この現象即ち實在の主義を主張せられて、消極的佛教を根本から打破せられたのであります。

ます。

それから日蓮聖人は晩年にどうなされたかといふと、堂塔伽藍を供へやうといふのを捨て、了つて、甲州の身延——今日に於ても不便な——の山奥へお這入りになつて、僅かに藁で葺いたぶつたて小屋といふやうな所へお住まひになつて、人から供養する所の衣服を纏ひ、人から供養する所の食物を食つて、寒い時には顛へて居られたこともある。さうして専ら文筆にお親しみになつて居られました。上人に芋なり餅なりを贈つて來る者があると、上人はその芋なり餅なりを贈つた人に、直に禮狀を書いて贈られる。此ういふ者までも遺文録の中に残つて居る。遺文録の中には斷翰零墨といへども残つて居ます。千歳の後、人をして感奮興起せしむる力があるのは、つまり上人の熱烈なる信仰からであります。終にどうなされたかといふと、身延の山に這入られてから、上人は非常

に圓滿な態度を以て人を導かれたのであります。六十になつても、身延の險山へ上つて、故郷の房州の空を望んで經を誦み、あの白雲の棚引く邊が故郷の在る所であらう。山河の有様は昔と變らぬが、昔と違つて今は父母は亡くなられたといふやうに、故郷の空を眺めて父母を慕はれた所の思親閣といふのが、今に残つて居ます。それから又故郷から海苔を送つて來た時に、海苔は相變らず此の世にあるが、最早父母は見る事が出來ぬといふて泣かれたといふことであります。世には日蓮上人といふ人は、血も涙もない情のない人であるといふ人がありますけれども、六十にして親を慕ふといふ人を、どうして感情がない人であるといへませうか。私はこの一事を以てしても、上人の人格の尊い事が分ると思ひます。今日では、この親孝行は詰らぬ者であるといふやうに考へる傾向がありますが、然しこの日蓮宗、天晴會に關係して居る者には、さういふ者はありませぬ。現に私は

昨夜愉快な話を聞きました。それは相當の地位に居られる人でありながら、七十一歳になるお母さんを自分で世話をして、お母さんが肩が凝つたから叩いて呉れといはれると、自分で肩を叩いて上げて、他の奴僕にさせぬといふ今日に於てもさういふ人があります。此ういふ人はつまり、日蓮主義の人である。日蓮主義といふのは、日蓮上人のなされた方法に由つて行くのが日蓮主義であります。日蓮主義を實行する上に於ては此ういふ日本の美點である親孝行といふ事を忘れてはならぬのであります。

又日蓮上人は親に對するばかりでなく、弟子に對しても涙の零れるやうな手紙を送られて居る。弟子が土の牢に入れられた事をお聞きになつて、今晚の寒さにつけても、定めし牢屋に居る弟子は寒い事であらうといふて、涙を零されたといふ事ではありますが、此ういふ怨のある先生に對して、弟子がストライキをやるといふやうな事が出來ませうか。ストライキを起す

生徒が學校にあるといふのは、生徒も悪いが、一つは先生の不徳の致す所であるといはねばならぬ。又親に不孝の子供があるといふのも、子供は素より悪いが、一つは親に慈悲がないからである。

猶ほそのみならず、日蓮上人は自分の乗られた馬に對しても、非常に可愛がられたのでありまして、池上から常陸の温泉へ行かれる時に、この馬は長く我を乗せて呉れたから、どうか外の馬子に取扱はさないで、私の伴れて来た馬方を付けて置いて呉れといはれましたが、是の如く動物に至るまで情を有て居られるのを見ても、上人の情に富んで居られた人であるといふ事が解ります。

上人は何というて居られますか。「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし」というて居られます。世の中を救はうといふ爲めに、上人は絶えず泣いて居られたのであります。それで教育家も宗教家も

この日蓮上人のやられた事を模範として、此の世の中は實に困つた世の中であるから、どうか世の中を救はなければならぬといふ考を以て、天下國家の爲に盡くさなければなりません。心理學上から觀ましても、哲學上から觀ましても、宗教上から觀ましても、日蓮上人は模範的人格を備へて居る人であると、私は思ふのであります。どうか諸君、諸君は遺文録の研究をなされて、何所何所までも、我が祖先にかゝる偉大なる人格があつたといふ事を追懷して、この偉大なる人格を模範として行かれん事を切に希望致します。これで御免を蒙ります。(大津天晴會にて)

第一 總 說

世に力ほど不可思議の物はない。物を生ずるのも滅するものも、事を變へるのも變へぬのも皆力である。若し世の中に力が無いならば、總ての物は現はれぬであらう。今日吾等が見る所の物は、何れも皆、力の現はれである。之を大にしては日月の運行、之に小にしては心臓の鼓動、皆力の現はす働きである。風の吹くのも、水の流るゝのも、鳥の飛ぶのも、獸の走るのも、一として力でないものはない。物理學者は之を「エネルギー」と名づけて、仕事を成し得る能であるというて居る。物理學者は、「エネルギー」を精密に研究して之を計算し、之に由つて器械學の應用も正確に出来ることになつて居る。

實に天地は廣大無邊の力の顯現であつて、物質の力にしても運動の力、靜止の力、熱の力、電氣の力、引力斥力など、種々に錯綜して此世界を成して居る。是等物質の力は、精密に計算し得るほどに、研究せられて居るのであるが、それにしても、なほ不可思議の點が少くないのみならず、假令如何に物理學が進むとも、全體として是等の力その物は、長へに不可思議である。吾等人間は、何時までも、此自然の廣大なる力の中に生活し、之を利用し、之を嘆美せねばならぬであらう。

然るに、是等自然力にも勝つて、不可思議なるは、精神力である。吾等は生れし初より、精神作用を有し、絶えず之を働かせて居る故、自らは氣付かぬが、少しく考へて見れば心力ほど不可思議のものはない。幾千萬年前の昔吾々人類の未だ世に現はれぬ前の事を知るのも心なら、幾千萬里を隔て、自ら往く事の出来ぬ國々の事、又は遠き星辰の世界の事までも知り

得るのは心である。況して前に説いたやうな廣大無遠な物質力を種々と利用して、己の爲めにするこの出来るのも心力である。昔は神として畏れ戦いた雷を捕へて車を牽かせ手紙を運ばせるも、心力の賜である。その他、今日見る如き所謂物質的文明のあらゆる進歩は、いづれも精神の力が物質の力に打ち勝つて、之を利用したのでないものはない。實に妙不思議なるは、精神の力である。

精神の力と、物質の力とは、如何なる関係があるか。精神力が本で物質力が生じたか。物質力が本で精神力が生じたか。それとも、二力以外の力があつて、是等の力を生じたか。これは大問題であつて、今こゝに答へることは出来ぬ。のみならず、今は是等の事に答へるのが目的ではない。ただ力には自然の物質力と人類の精神力とがあつて、何れも不可思議なる能を持つて居るが、就中精神力は一層不可思議のものであることを述べ、こ

れより下に精神の妙力に就いて述べる緒言としたのである。

第二 自力と他力

自然には、自他の別がない。假令或る物を他の物と區別するにしても、それは人がするのであつて、自然自らには自とか他とかいふ心は無い。随つて、自然の物質力は自力でも無ければ他力でもない。所謂自然力である。勿論是等すべての力の由て來る根本は、吾々人間の持つて居るやうな、否、それよりも幾層倍も勝つた心の働のある本體であらうが、その力が自然界に現はれては、個々の物が皆心あつて自己の考で事をなすのではない。それ故、自然力に就いては自力と他力との區別をする事も出来ねば、又する必要もない。然るに、人間には靈妙なる精神作用があつて、自と他との區別が明かである。随つて、自己の意思に由つて成し得る事は自力で、他の

助に由つて成し得る事は他力である事も、自ら明かに分る。併し又、一層細かに考察すれば、吾々が自力と信じて居る事も、實は飲食物や、空氣や、光線のやうな自然物の力を假りて居るのであるといふこともいへる。又之は事實であるが唯それが自己といふ一體系の下に總べられ、その自己の命令次第に、自由に働を現はす點より之を自力といふのである。されば自己といひ自力といふのは、心あつて後の事である。而かも心が一定の發達を遂げてから後に起る考である。之を以ても人にあつて心が如何に大切な地位を占めて居るか分る。

此の如く吾々人類は、その身體生命が他の自然物の助に由りて出來て居るのみならず、その最も大切なる心力も亦他に待つことが多いのである。吾々は、自己の主義を有し、自己の信念を有し、自ら選擇し、自ら決斷する。吾々は、立派に獨立して居る個人である。所謂自力に由つて世に立つ

て居る者である。併しながら、前の場合と同じやうに、是等の自力と信ずる精神の内容を分解して見れば、その大部分、否、殆んど全部が自己を取り巻いて居る社會から得たものであることが分るであらう。さうして見れば、自力というても、純粹の自己のみの力といふものは無い譯である。

併し自己の精神内容が、他の個人及び一般社會から得たもので出來て居るといふやうなことは、一定の發達を遂げた心を有する者が、反省の結果として覺り得ることであつて、日常の經驗に於ては何人でもかゝる事は意識せず、單獨の自己といふ考の外起るものではない。即ち前に言うた如くに、吾々が何事かを爲す時、又は何事かを信する時、決斷する時等、すべて自ら己が爲し信じ決する意識するのである。通常は此意味に於て、自力といふ語を用ゐるのであるが、吾々の有して居る全き力は、此意味の自力では、充分遺憾なく發揮せられるものではない。それには、必ず他力を

要するのである。今茲に説く他力は、前に述べた如く、反省の結果として、自力の中に存在して居ることを知り得る他力ではない。余は、此の種の他力をば包含的他力と名付ける。然るに今説く他力は、自ら他から刺激を受けることを自覺し、なほ他の助の加はることを感ずるものである。余は之を表現的他力と名付ける。凡そ、人の力は、心力でも、體力でも、かゝる表現的他力が加はつて後、始めて自己の有して居る總ての力が充分に現はれるのである。

極めて簡單にして卑近の例を擧げて見れば、通常平穩の場合に、或る重い器物を持ち擧げんとしても能はぬのに、火事その他の事變に遭遇する時は殆んど夢中になりて之を持ち運ぶに容易に動かし得るものである。而かも事終りて後に、再び之を動かさんとしても、到底一人の力には及ばぬ事が多い。是れは如何なる理由であるかといへば、事變といふ外部の一大勢

力の刺激が加はつて、平生の自力にては到底能はぬほどの隠れたる力が現はれたのである。併し是れは偶然の出来事で、人為の刺激ではないが、人為的にも之と同様の事が出来る。例へば、或人に催眠術を施して置いて、之に強い暗示を與へれば、その人の平生に於ては、到底成し能はぬことを容易に成し得る事がある。余は屢々此種の實驗をして、特別の刺激の無い場合には、到底動かすことの出来ぬ程の重い物を安々と持ち擧げしめたり、或は平生ならば到底書き能はぬ文字を美しく書かしたことがある。催眠術を施す者の暗示は、即ち一の他力であるが、此他力が教を受ける者に加はると茲に非常の力が生ずるのである。自力と他力との關係は大略此の如きものであつて、自力を外にしては他力は自己に交渉なく、他力を外にしては、充分の強度を發揮することは出来ぬのである。

第三 妙 力

茲に述べし如き、簡單なる刺激でも、他力が加はると、自力が驚く可き強度を現はすものであるが、況してその加はる表現的他力が超人的偉大の勢力であれば、その人の現はす力は、到底普通の考にては測る可らざるほどの不可思議の能を生ずるものである。余は之を妙力と名付ける。妙力は、絶對無限の他力に對する信仰に由りてのみ得ることが出来る。

信仰は宗教の生命である。信仰の無き所には、宗教はない。宗教的信仰は要するに絶大の他力に對する自己の信頼であり服従である。合體せらるることであり、包容せらるゝことである。吾々人類は、かゝる信仰に由りて始めて自己の天分を全うし、自己の有して居る力を毫末も遺憾なく發揮し得るのである。古來妙力が信仰に由つて現はれた例は數多くある。

妙とは、不可思議の事をいふのであるが、不可思議というても、妖怪變化の如くに道理を以て律すべからざる無稽の物ではない。日常普通の經驗を統一し往く法則原理等から見れば、外觀上不一致に思はれるのであるが、一步高き所より見れば、正當なる理由の存することで、何人も此妙力を現はすことが出来るのである。唯包含的他力の多く加はつた自力を有すること少く、且つ絶大の表現的他力に對する信仰の絶無又は輕薄の者は、之を得ることが出来ぬのである。

妙力は、心身すべての方面に現はれるが、就中意思作用に於て特に著しく現はれる。意思作用は吾々人類の行爲の原動力である。されば實行には、最も信仰を要する。信仰には、その對象が無くてはならぬ。對象には、神もあり佛もあり、又人もある。何れにしても、人格的完全のもの優勝のものである。併しその完全優勝が、たゞ自己の主觀に於てのみであつて、客

觀的普遍性確實性の乏しいものであるならば、之より發する力も亦劣らざるを得ぬ。是れ同一信仰の差を生ずる所以である。何れにしても、妙力は實際的行爲に於て最も著るしく現はれるものであるゆゑ、實行を主とするものは、何時も何等か信仰の對象となるべき人格的他力を負うて居るものである。

然るに、純粹智力的の事で、實行にかゝらぬもの、又は實行との關係の薄いものは、表現的他力の加はらぬ所謂自力を以て成し得るやうに信せられる場合が多いものである。勿論智力上の能でも意思の加はらぬことは無いのである故、是れ亦信仰に由りて妙力を現はし得るのであるが、純粹智力上の事は、主觀的に自己内心の仕事として終り、他と關係する事が少い故に自己の思想自己の主義を信じて、他力を假らうとせず、又その影響に就いて考へぬのである。それ故、同じく道德の書を読んでも、純粹に智

力的要求の満足を得る爲めのみであるならば、その著者の何人であるかは問ふ所ではあるまい。併し若しその書が、自己の行爲に有效なる能を及ぼさんが爲めに讀むのならば、著者が景慕すべき高尚偉大の人格であるといふ事は、最も大切の條件であらねばならぬ。何故といふに、此場合にはその偉大なる人格が信仰の對象として、讀者の精神に入り、之が表現的他力として、讀者の自力に加はり、終に猛然起つて困難と戦ひ、苦艱を忍びて、その道德主義を實行するに至る爲めである。

此の如く、妙力は人格的信仰に基き、實行に現はれることが最も顯著である。されば空理に馳せ空論に傾き、形式に満足し、虚儀に囚はれて居る者は措いて問はず、苟も實理實行を尙び、自己の天分を充分に發揮し、所謂自己實現の實を擧げんとする者は正しき信仰に由りて、妙力の發現を期せねばならぬ。

第四 東洋の學と西洋の學

實行を尙ぶ教に、表現的他力の必要なることは、東洋の學と、西洋の學との大體の傾向を比較して見れば、よく分る。從來東洋の學、就中儒學に於ては祖述と云ふことが主になつて居つて、如何なる學者も、之は自分の説であるというて、全く先人と獨立して一派の學を唱へるといふことは甚だ少い。事實は自己の説であつても、之が即ち聖人の教の眞意であるといふやうに説いて居る。孔子は、實に儒教の祖師とも仰がれて居る人であるが、決して自己の説として主張せぬ。所謂述而不作であつて、口を開けば文武周公等の聖人を説いて居る。陸象山や王陽明のやうな特殊の説を立てた人でも、皆自説を以て聖人の旨に適ふものとして述べて居るのである。我國の學者にしても、その通りであつて、仁齋にしても徂徠にしても、な

か、卓抜の見識を有して居つた人であるが、何れもその説が聖人の意に合ふものと信じて説いたのである。そこで是等の状態を外面から見れば、如何にも古に泥んで、先人以上に出ることの出来ぬ、卑屈の事のやうにも見えるのである。

然るに、西洋の學は遠く希臘の時代より弟子が先生の教を祖述するといふやうなことは甚だ少く、寧ろ先生の缺點を補ひ、或は全くその反對の説を立て、先生に對抗するほどである。その有様は、ソクラテース、プラトーン、アリストートル레스の師弟の關係を見ても、明かである、プラトーンはソクラテースの弟子であるけれども、決して先生の説を祖述したものである。假令先生と同意義の事を説くにしても先生の教であるとして説いたのではない。況してアリストートルレスはその師のプラトーンの學說學風とは恰も相反した態度を取つて居る。要するに、是等の人は學說を述べる

には表現的他力を假らず、何時も自己の説として説いて居るのである。その後、歐羅巴の各國に出でた大學者の態度は、何れも之と同様で、先人の説を補ふか、或は寧ろ之に反對するか、假令賛成するにしても誰の説を信ずるとして祖述するといふよりも、寧ろ自己の説と誰の説とが一致するといふ態度に出て居るやうに思はれる。そこで西洋の學は東洋の學とは正反對に守舊頑固の點なく、所謂日進月歩して次第に新學説が現はれるのであるといふ結論に達するのである。

以上東洋の學風と西洋の學風との違ひは、何に基くのであらうか。從來多くは、東洋人は固陋卑屈で、古をのみ尙ぶ性情を有して居り、之に反して西洋人はその自然の性情に於て、進取の氣象に富んで居るゆゑ、かゝる學風の相違を來したのであると説明されて居つた。成る程、概して言うとかゝる傾向も存在して居るかも知れぬ。併し、余は東西學風の相違は、此

他に大切な原因があると思ふ。それは、學問の目的である。若しもその目的とする點が、純粹に人の智慾を満足せしめるにあるならば、決して表現的他力を背後に負ふことを要せぬ。寧ろ時としては、之あるが爲めに、妨害となる場合もあらう。されば此目的の爲めには獨立獨歩先人の説を取り入れるにしても、所謂藥籠中の物とし打つて丸となして我が物とするが宜からう、又假令他力を假るにしても、それは包含的のものであつて、自らは他力が實に加つて居るといふやうなことを意識せぬであらう。

併しながら、若しも學問の目的が、之に由つて人を實行に導くのであつて、その學説が直ちに權威を以てその人を支配し、奮つて之に従つて行動せしめやうとするには、如何しても表現的他力が加はつて、今己の説く所は古聖賢人の道である、決して微弱なる我一己の見ではないといふことを自覺して説く方が有効である。吾々日常の經驗に於ても、二と二とを合せ

て四となるといふことは、何人より聞いても同一であるが、正直を守らねばならぬといふことを聞いて、それを實行に現はすに至る力は、聞かされる人に由つて非常に違ふ。己の尊信し隨喜して居る徳高き人より言はれた一言は、生涯忘れぬ程の強い印象を與へて、長くその身の實行を指導するものであるが、尋常一般の人、或は自ら信用せぬ人より同一の事を聞かしめられても、決して同一の効果を現はすものではない。之を以ても實行の學が、古來尊信せる人の説を祖述することの有効なる所以が分る。

東洋の學、就中儒學は實行學である。宋以後性理學が起つて純粹哲學の範圍にも及んだが、その本來の目的は、決して智慾の満足などいふことではなく、之を以て修身齊家治國平天下の用に立てやうとするのである。それ故、その學説には、權威がなくてはならぬ。即ち各人が隨意に自己の學説として述べたのでは、人を動かす力が弱い。随つておのづと聖人の説を

祖述することになつたのであらう。併し、是等の學者は決して政略上から聖人の説として説いたのではなく、學問の目的の實行に存するの點より、自らも先人の表現的他力に由つて、實行の經驗を得たのであらう。勿論儒者の中にも、知的研究に傾いて居る者は、實行と學説との一致せぬものも少くないであらうが、大體上儒學は實行と伴うたものである。

西洋の學にも、實行を重んずること儒學に類したものが無いことはないが、概して、その目的が、智慾の満足に存して居るゆゑ、その態度が全く儒學と異つて居るのである。されば一概に、西洋は進歩主義であつて、東洋は退嬰主義である爲めに、一は先人を祖述し、他は之を補ひ或は之に反して自説を立てるのであるといふことは出來ぬ。西洋に於ても、純粹學術にあらずして、實行を重んずる宗教の如きは固より祖師の教を祖述して、之に信賴し、之に歸依して居るのである。故に東洋に於ても學問が複雑に

なり、種々の目的を以て之を研究するやうになれば、必ずしも従來の如く先人の説を祖述するといふことのみではなくなるのであらう。之と共に、西洋に於ても宗教以外に一の學説を以て實行を指導して有効ならしめやうとする場合には、必ず權威ある教訓として先人を祖述するやうなことも現はれるであらう。

併し余は今是等學風の相違に就いて、批判をするのが目的ではない。詰り、前に説いた妙力が實行の場合に最も有効に現はれることの證明として、東西學風の相違を挙げたのである。いでや是より進んで宗教の篤信が驚く可き實行の妙力を發揮した例を挙げるであらう。

第五 日蓮上人及び門下の偉人

日蓮上人が、建久五年四月廿八日の正午に、清澄の法堂に、始めて自己

の所信を披瀝し、直ちに東條景信の劔の難に逢はんとせられし以來、鎌倉小町の辻説法に、瓦石刀杖の妨害を受け、松葉谷の草庵に燒打に逢ひ、伊東に流され、小松原に攻められ、終に龍口に死刑を宣告せられ、總かに免れて佐渡に遠流せらるゝに至るまで、刀杖罵詈、常に絶えず、大難小難交も迫るも、勇氣は益々加はりこそすれ、寸毫たりとも所信を曲げず、天下を敵として大奮闘を誠み、終に天下に打ち勝つたのは何の爲めであらうか、勿論上人の天資が、千萬人に勝れて居たことは、いふまでもないが、上人の背後には、常に久遠本佛があり、法華經があつて、妙力を發揮せしめられたのである。自力と他力との一致融合は、上人の教であるが、その教は、上人自らが最もよく實現せられて居る。上人の釋尊に對し、法華經に對する信仰は、如何なる形容を以ても言ひ現はすことの出來ぬ程、固いものであつた。實に上人は「法華經の諸菩薩十羅刹日蓮を守護し給ふ上、淨土宗

の六方の諸佛、二十五菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊守護の善神、日蓮を守護し給ふべし。例せば、七宗の守護神が、傳教大師をまもり給ひしが如しとおもふ」この確信を有して居られたのである。斯る信仰があつてこそ火の中の水の中をも恐れず、刀杖罵詈遠流擯出凡そ如何なる迫害も、苦難も、寸毫の躊躇なく、自己の目的とする所に向つて進むことが出来るのである。日蓮上人は、偉大であるが、上人をして此偉大をなさしめた宇宙の大靈たる久遠本佛の妙力は、更に偉大ではないか。否上人の如き信仰を體得した佛陀に在つては、その人間としての行動が直ちに大靈の發動である、法華經の人格化である。こゝに至れば、自力もなく他力もない。絶對の妙力として、現はれるのである。

日蓮上人が、釋尊を通し法華經を通して、久遠本佛から無限絶大の驚嘆すべき妙力を得られた如くに、上人の門下には、上人を通して同じく絶大

の妙力を發揮した人が少くない。有名なる加島法難に於て、神四郎か平ノ左衛門の爲めに、松の太木に縛られ念佛申さずば射殺すべしと脅迫せられながら、「さても大老どの、理不盡さよ。我れ一たび身命を法華經に奉り、國の爲め君父の爲め、求めて無上の道に入れる身の、たとひ八裂鋸挽き如何なる責苦に逢へばとて、この正法の金剛信を破らうや……………いかに強敵かさなることも、努々退く心なく、恐るゝ心なかれ、縦ひ頭をば鋸にてひききり胴をば稜鋒を以て突き、足にはほだしを打つて錐を以て捫むとも、命のかよはん程は、南無妙華蓮經南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死する……………の誓ひは、吾大上人の明訓なり。うれしや、今我れその實を履んで、法華經の爲めに死することよ。いざ射て殺せ。吾肉團は死すとも、吾心は死なじ最後の梵音耳傾けて拜聽せよ。南無妙法蓮華經」と大音聲に唱へ、終に七本まで矢を受け、一本を受ける度に唱題して悲壯の死を遂げた如きは、

殆んど古今未曾有の殉教者であるが、かゝる驚く可き力は、何處から來たかといふに、神四郎自らが述べて居るやうに、背後に上人があり、法華經がある爲である。匹夫にしてかゝる非凡の意力を現はすことは、表現的他力の信仰なくしては、到底出來得ることではない。

日像上人は、弘安五年十月十三日日蓮上人が池上に於て入滅の時、僅かに十三歳で帝都弘通の重任を委囑せられた。この小童は、決して祖師の寄托を空うせず、學徳を磨いて、あつぱれ重任を全うせられたのであるが、その廿五歳の頃には、十月廿六日より百日の間毎日酷烈の寒さを物ともせず、晝は細字を寫し、夜は山井が濱の荒浪に全身を浸して、久遠偈百遍題目數萬遍を唱へて、曉に達せられたといふことである。かゝる勇猛精進の力は、何處から出て來るか。信仰！信仰！唯一の信仰である。日像上人の心には、日蓮上人が宿つて居る。久遠本佛が無限の力を與へて居る。

永享の頃、日親上人は、時の將軍足利義教の爲めに、種々の迫害を受け、禁獄拷問の慘刑廿八度に及んだといふことであるが、就中その最も慘なるものは、義教が、上人の強烈なる折伏を憤り、燒鍋を頭上に被らすに至つた事である。かゝる野蠻なる慘酷の刑を被つても、上人は自若として題目を唱へつゝ、なほ頻りに義教の非を呵責したといふことである。嗚呼此の勇氣、此の熱情は、何處から來たのであらう。又た々祖師を通して久遠本佛の威靈の加護に由るのである。

慶長の頃、日經上人は、尾州熱田に布教して、淨土宗の僧と法論を闘はし、その結果、終に、駿府に訴ふるこゝとなつた、然るに、家康は、論して日經上人に詫びよと命じた。上人は罪のないのに詫る理由はない、法門の決は是非に在ると主張した爲めに、慶長十三年十一月十五日江戸城に於て大問答を行ふこゝとなつた。上人は、その日を楽しみに待つて居たが、

卑怯にも敵はその前夜數十人の侍どもを遣はし、上人の宿所に亂入して師弟を袋叩にして半死に至らしめた。上人は、残念ながら、止むなく問答の日延を願ひ出たが許されず、病氣なら釣臺にて出仕せよとの事で、戸板に乗せて半死の病體を法論場に運んだが、口も利かれず、字も書かれず、一言の問答もなし得ぬ厄難に乗じて、敵は勝手なことを言ひ立て、終に上人の負と判決せられた。上人師弟は、之に服せず、役人どもが、如何に強迫しても敗狀を書かなんだ。その後、上人の諫争に激して、家康はわざ／＼京都に上人を召し上せ、市中を引き廻はしたる上、六條河原で耳鼻そぎの慘刑に處した。何たる暴虐の處置であらう。かゝる慘烈の目に遭うても、自若としてその所信を變へず、鼻なき顔、耳なき頭を以て、諸所を説法し廻はり多くの信徒を得、新に數十の寺を建立するに至つた偉大の力は、何處から出たらうか。聞く所に由れば、日經上人は、大切な法論等の場合に

は、何時も祖師の像を負うて往つたといふことである。是れ、實に、具體的に表現的他力の加はることを示したものである。

遠く、昔の事を引くまでもなく、今日の世に於て、風俗ともに篤信の士女が、他人より尊信せられ、歸依せられるのは、何れも、その人の背後に祖師を負ひ、之に由りて宇宙絶対の大靈より絶えざる力を受けつゝある爲めである。それゆゑ、單に學術の上より見れば、是等の人に勝つた者は多くあつても、萬人の尊信歸依を繋ぐことは到底篤信の士女に及ばぬのである。かゝる事を考へれば祖師たる日蓮上人及び法華經の力の如何に偉大であるかといふことは、今日に於ても歴々と目の前に示されてあることが分る。是れ實に妙力の靈現ではないか。吾々も、修養を積み信仰さへ厚くば、如何なる偉大なる妙力を顯現し得るか、殆んど測り知ることが出来ぬ。

(歴史に關することは「日蓮上人の教義」に由る詳細は同書を参照せよ)

第六 現代の日蓮上人鑽仰

以上に、余は日蓮上人及び其の門下の偉人に就いて、妙力の顯現を詳述したが、かゝる事實は、必ずしも上人及びその門下の人々に限つた事ではない。他の信仰に於ても、有り得る事である。然らば、何故に吾々は日蓮主義を鼓吹し日蓮上人を鑽仰するかといふに、上人の信仰教義が、國の上から見ても、時の上から考へても、最も今日の吾々に満足を與へるからである。固より上人の教は、時と處とに制限せられるものでは無い。其の根底には、永遠不朽の生命があらうが、その顯現が現代の我國民の自覺に、最も痛切な刺激となつて、吾々國民が偉大の天職を成し遂げるに必要不可欠の力を與へるものであると思ふ。余は今次に、その理由の大略を記さう。

(一) 日蓮主義は統一的なり。日蓮上人は、元來佛教の紛々擾々として歸一

する所のない事に疑を懐いて、研究の歩を進められたのである。それ故、上人の教の歸着點は、統一といふことにある。上人は殆んど二十年の研鑽に由つて、法華經を唯一無二の所依の經とし、教主釋尊を久遠本佛の顯現として、あらゆる佛、あらゆる教を皆之に攝取統一した。されば、上人は「法華經壽量品に云く或は己身を説き、或は他身を説く等云々東方の善徳佛、中央の大日如來、十萬の諸佛過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文珠師利舍利弗等大梵天王第六天の魔王、釋提桓因王日月天明星天北斗七星二十八宿五星七星八萬四千の無量の諸星、阿修羅王天神地神王山神海神宅神里神一切世間の國主とある人、何れか教主釋尊ならざるや。天照太神八幡大菩薩も、其本地は教主釋尊なり。例せば、釋尊は天の一月諸佛菩薩は萬水に浮べる影なり。釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり。譬へば頭を振ればかみもゆるぐ、心はたらけば身動く、大風

吹けば草木しづかならず、大地動かば大海さはがし、教主釋尊を動かし奉れば、ゆるかぬ草木やあるべき、さはがぬ水や有るべき」というて居られる。それは、固より壽量品に基いた信仰であらうが、實に痛快なる大統一ではないか。

今日の思想界も、紛々擾々歸着する所を知らず、人々趨歸に惑うて居る。此の時に當つて、理義明白に、而かも熱烈人を動かすの信仰を以て諸教諸佛の統一を試みた日蓮上人を背後に負ふことは實に現代を解決するに、無上の妙力を得る絶好の道ではないか。

(二)日蓮主義は積極的なり。日蓮上人は、如何なる場合にも、積極進取の主義を以て、法華經の廣宣流布に努められた。是れ最も今日の吾々が學ぶべき點である。元來佛教といへば、直ちに未來觀にのみ捕はれたもの、如くに思ひ做すほど、佛教は此世を假りの世とし、未來を寂光淨土として、

萬事が消極的に無常を説く場合が多かつたのである。勿論上人に於ても、無常も説けば未來も説かれるが、上人はそれが爲めに、此世を假の世となし、此土を穢土として、消極的に輕しめ卑しめることなく、却つて信仰により悟りによつて、煩惱即菩提娑婆即寂光土の實を現はすべきことを熱心に説き勧められた。積極主義は處世にも修養にも信仰にもあらゆる方面に於て何時も必要であるが、現代は特に必要である。何事を成すにも、上人が死に臨んでさへ、「これ程の喜びを笑へかし」と述べられた意氣を以て進まねばならぬ。上人一代の歴史は、奮闘の歴史であるが、その奮闘は積極進取の奮闘である。上人の何處の部分も切り取つて見ても、消極退嬰の跡を見ることは出来ぬ。かゝる人格を仰いで、その表現的他力を得ることは、吾々現代國民の實行上缺く可らざることを、思ふ。

(三)日蓮主義は國家的なり。宗教と國家との關係に就いては、昔から種々

の議論もあり、又歴史もある。現在の我國に於て、又此議論がくりかへされんとして居る。元來宗教は、人と絶對との關係を説くものである故、超國家的のものである。されば、宗教の説き方に由りては、國家と衝突せぬとは限らぬ。厭離穢土欣求淨土といふ教なども、説き方に由りては、此現實の國家を穢土として卑しめ、一日も早くかゝる場所を脱却して、未來の淨土に往き度いといふやうな非國家的厭世觀を起さぬとも限らぬ。併し宗教が、國家と結び付き、國家がその信仰上大切な意味を有するものとなる時は、宗教はその國民の愛國心を非常に強めることとなる。

佛教は、元來超國家的であることはいふまでもないが、日蓮上人は此教の中より、我日本國の天職を發見し、盛んに愛國の精神を鼓吹せられた。上人は、「我日本國は一閻浮提の内、月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超えたる國ぞかし」と喝破せられた。これは普通に我國民の説くが如くたゞ山

川風土の美とか、君臣の關係とかいふ、現に表はれて居る所を見て述べられたのではない。上人金剛信の對象たる法華經の弘まるべき運命を有して居る國であるといふことを、佛の豫言に由つて斷定した爲めである。されば、上人の愛國心は、深い信仰の根底を有する超絶的のものである。「先づ國家を祈りて、須らく佛法を立つべし」といひ、「日蓮生を此土に得たり。豈に吾國を思はざらんや」といひ、「我れ日本の柱とならん。我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん」と言はれし類、上人の心には信仰の對象と結合して寸時も國家觀念の去ることは無かつたのである。多くの宗教の中には、その主張を曲げて強ひて國家に迎合するものもあらう。然るに、上人のは、國家その物が主張の中心となつて居るのである。是れ日蓮主義が、最も熱烈なる國家的色彩を帶ぶる所以である。かゝる熱烈なる愛國的精神を有する先人を鑽仰して、その表現的他力を得ることは、現

代に於て特に必要ではないか。

(四)日蓮主義は現實的なり。すべて、人の價値は、現實に於て證明せられるのである。如何に高妙な言説も、如何に深遠な理想も、之を現實化する事が出来てこそ、その價値が確實に認められるのである。それ故、吾々が日常經驗して居る現實には實に貴い意義があるので、決して之を輕すべきではない。併し、現實を貴ぶというても、理想のない現實は、動物の生活と同じことであつて、殆んど何等の價値も無い。所謂無理想主義瞬間満足主義などは、是等の憐むべき現實主義より來るのである。

日蓮上人が、現實に重きを置かれたのは、所謂事の一念三千論に基くので、その根底には深遠なる理想が横はつて居る。上人は、實に娑婆即寂光土、煩惱即菩提を如實に主張せられたのである。されば「萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は義農

の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理顯はれん時を御覽せよ。現世安穩の證文、疑ひあるべからざる者也」といひ、或は「御みやづかひを法華經とおぼしめせ。一切世間治生産業者實相と相違背せずとは、此れなり」というて居られる。此の如く、理想と結び付けて現實を重んじ、目前卑近の事の中から高遠の眞理を看取することは、實に萬古不滅の生命ある教訓であり、學問である。かゝる主義を實行した偉人を背後に負ふことは、現代に於て又最も必要ではないか。

(五)日蓮主義は獨立的なり。日蓮上人は、その理想としては、釋尊及び法華經を有して、それから偉大なる表現的他力を得られたであらう。併し、自己の所信を實行するに、毫も人の憐を乞ひ助を求められなかつた。古來有名なる宗教家の多くが、大抵何れの點に於てか、有力者の補助に待つて志を成したに反して、上人は自ら言はれた如く、天下萬人皆反對したので

ある。初めは、誰一人之を助ける者もなく、却つて種々の妨害を加へた。後に至つて歸依者が出来たが、何れも進んで、上人の前にひれ伏して、その渴仰者となつたので、上人自ら助を求めたり、歸依を頼まれたりしたのではない。眞に、獨立獨歩、自ら自己の運命を開拓した事日蓮上人の如きは、我國三千年の歴史にも知んご類例が無い。之を世界の歴史に求めても匹儔が得難い。現代の如くに、自ら努めること少く、徒らに他人の力を假らうとする者の多い時に當り、かゝる稀代の偉人を理想の中心として、その偉大なる刺激を受けることは、最も必要ではないか。

第七 結 論

以上に於て、余は余の信ずる妙力とは如何なる能であるか、又その妙力が如何にして生ずるか、如何に吾々の生活に必要なかを説き、且つそ

の力を得べき理想的人格として日蓮上人を挙げたが多くの人の中には種々の批評もあらう又異論もあらう。就中理想的人格を日蓮上人に定めた點に於て、反對する人もあらう。併し余は前章に述べた理由に基いて、上人を信仰する。然かも上人は、吾々大和民族の中から出た偉人である。吾々の祖先の一人である。余は吾々の祖先に、かゝる偉人があるのを名譽として之を理想的人格に定めたいと思ふ。勿論、單に同一民族であるからというて、人格の劣つた者、學説の淺薄の者を殊更に崇拜する必要はない。併し、折角自國に立派の偉人があるに、之を差し置いて他に走る必要はない。余は實に日蓮上人は、宗教界は勿論、その他すべての方面に於ても、最も傑出せる世界の偉人であると信ずる。我國に上人を有するのは實に我民族の誇である。

論者の中には、偉人を崇拜するは、現に世に立てる中年以上の者の恥辱

である、自己の腑甲斐なきことを暴露するのであるといふやうに説く者もある。それはさうであらう。併し自己の腑甲斐なきことを自覺する者は、偉人又は偉人となる資格のある者である。自ら安んじ自ら満足して、己を誇る者は、小人である。少くとも發達の見込なきものである。人は長へに謙讓に、自らの足らざることを思ひ孜孜として奮勵し、偉人の刺激に由つて、妙力の感得を期せねばならぬ。理想より受くる他力は、自己と融合して高尚なる人格を形成する。かゝる他力を求めるのは、決して卑屈ではない。併しかゝる敬虔なる信仰の無い者は、多くは現實の人に依り、官位勳爵若しくは物質的財産の助を他人に求める。是等こそ眞に卑屈といふべきである。固より、人は孤立すべきものではない。互に相依り相助けて往くのは、人生の通義であるが、漫に人の力を假らんとするが如きは、一大恥辱である。余の所謂妙力に信賴するが如きは、畢竟自己所得の力を理想の

刺激に由つて遺憾なく發揮するのである故、實に正々堂々たる者であつて、人類はたゞ此の方法に由つてのみ、よく妙力を得て、偉大の事業を成し得るのである。

悲める人よ。疲れたる人よ。悩める人よ。悶ふる人よ。恐るゝ人よ。失望せる人よ。速に日蓮に來れ。彼は汝の爲めに悲を去り、疲を回復し、悩を癒し悶へを安んじ、勇氣を興へ、望を授くるであらう。此妙力は、唯自己の經驗に由つてのみ感得することが出来る。

如是我觀

一四二

第一 理想

西洋の諺に「人は食するために生きて居るのではなく、生きて居るために食するのである」といふことがある。これは實に尤のことで、食するといふことは、たい生きる手段に過ぎぬ。然るにあまり食することに重きを置けば、却つて之が目的となり、生きて居ることが手段になつてしまふのである。誰も此の諺を見れば、當り前のことであると思つて別に心にも留めぬであらうが、世には殆んど食するために生きて居るやうな人が決して少くない。かやうな人はたとひ形は人であつても、心の働は下等の動物と殆んど異なる所はないのである。如何にも氣の毒の事ではないか。併しや、進んで生きて居るために食するにしても、たい生きて居るといふばかりで、

其の生活に何等の意味もないものは、同じく動物の生活と何等の違もないので、是れ亦人として恥づべきことである。

人と動物との差異は種々の點から之を認めることが出来るが、就中最も大切なることは、人は精神の高き發達をなし、我は何のために食するのであるか、吾は何のために生きて居るのであるかといふやうなことを考へ明らかめ、よく其の目的とする所に進むことが出来ることである。人は誰でもかやうな高き發達をなすべき精神を持つて居るのであるが、教育を受けて之を研かねば、低き程度に止まつて居るの外はない。たとひ教育を受けても精神の修養に力を用ゐねば、依然として意味なしに一生を送らねばならぬ。

借て人が自ら己のする事を考へて見れば、いづれ何等かの目的のないことではない。一寸手を舉げるのも傍の物を取るためである、一寸足を投ずる

一四三

のも庭園に出づるためであるといふやうに、一々意味があり、目的があるのである。唯かやうに眼前の事のみでなく、或は數年或は數十年かゝつてする事には一層明かな目的があつて、此の目的を實現するために、吾等は種々の辛苦をも忍ぶのである。かくの如く人は絶えず何等かの目的を以て、種々の動作をなして居るものであるが、此の目的を起さしめるものは何であるか。是れ即ち人の精神が進むに従ひ、自ら己の缺乏を感じ、此の缺乏を満たす爲めに種々と心の中に考を書き、其の考の熟して、これならば現在の状態よりも勝つて居る、此の方がよい、之を實現したいといふ希望である。故に若し人が現在の状態に満足して何等の不安も不足も感せぬ時には、一切の働一切の動作を起さぬであらう。大なり小なり吾等が動作し行爲するは、何等か缺乏を感じるからである。以上の如く吾等が現在の状態に満足せずして之に勝れる状態を想像し、これならば十分である圓滿であ

ると考へる目的を理想といふのである。故に人の志す箇々の小目的にも小理想があるであらうが、又人の生涯に行ふあらゆる行爲を支配する大理想がなくてはならぬ。前に挙げた人と動物との差はつまりかゝる理想の有無に歸着するのであるが、同じ人の中でも其の人品の高下は理想の如何に由ることである。凡そ世に理想なき人或は理想低き人ほど憐な者はない。ただ現在の状態に齟齬し、本能の導くがまゝ物欲の促すがまゝに生活し、之を満足すれば動物の如くに喜び、之を満足せしめざれば動物の如くに怒り或は悲む。色食は彼等の唯一の生命である、金錢は彼等の唯一の刺激である。彼等は曾て人の人たる所以とか、人生の運命とか、人生の目的とかいふやうなことに就ては考へぬ。つまり彼等は向上の心を奮ひ起すべき、高き目的の刺激を有せぬのである。彼等こそ食する爲めに生活し、性慾を満たす爲めに生活し、金錢を蓄ふる爲めに生活して居るのである。人が若し

かやうなものであるならば、人といふものは何たる情なきつまらぬものであらうぞ。

幸にして人には前に述べたるが如く、理想を構成する心の働がある。高き發達をなしたる心を有する人の立てたる理想こそ、その人をして常に向上し常に進歩し動物界に遠ざかつて圓滿の人たらしめ、終には神にも佛にも接近せしむるものである。此の大理想が即ち人生終極の目的であつて、此の世に生れたありとあらゆる人が日夜云爲して居るのは、皆此の大理想の實現を期して居るわけである。理想の無い人は之を自ら覺らぬのであるけれども、人類の運命はつまり此の大理想に向つてゆくより外はないのである。此の理想さへ明になれば吾等の生きて居る意味も明になり、吾等の爲すべきことも吾等の進むべき路も皆明になるのである。故に理想は實に人の生命である。靈の光明である。之なければ暗く之なければ死あるの外

はない。理想のある所には活氣を生じ、理想のある所には希望を生じ、理想のある所には威力を生ずる。富貴も淫することが出来ず、威武も屈することが出来ず、去りて貧賤も移すことの出来ぬ儼乎たる精神は何から出来るか。是れ亦堅固なる理想の然らしめる所である。理想あれば煩惱も菩提となり、理想なければ菩提も煩惱となる。凡そ世に何物が大切なりとて理想ほど大切のものがあらうか。あはれ讀者よ。人と生れし甲斐には誰も人として最も大切なる理想を持ちたきことではないか。如何に美衣をまどひ美食に飽き、その外あらゆる物欲を恣にしたりとて、動物と何等の選ぶ所のないのは人として恥づべきことである。

併しこれほど大切の理想を各自の狭き經驗淺き智識を以て、みだりに構成し、これこそ人生の大目的である。これさへ得れば圓滿無缺であるを信じて、存外誤つたつまらぬことであつたり、或は理想と立てる所のもの

は可なりとするも、之を實現する方法を誤つて亂暴狼藉のこゝをしたりするやうなことがあつてはならぬ。それゆゑ苟も自ら己の修養に志し向上の路をたどりたいとおもふ心がおこつたら、或は先輩師友に尋ね或は歴史に或は倫理に、書に依り理に質して十分慎重に十分深遠に考へて見ねばならぬ。此の時特に重きを置くべきは宗教である。すべて現在の世に於ても己に勝れる先輩師友があるから之に詢ふことが必要であるが、古來己れの現在知れる人々に勝れる聖人賢人が幾人あつたであらうか。歴史や倫理や宗教は、或は是等の聖賢の事蹟を示し、或はその理想信仰を教ふるものである。勿論古聖賢の理想である信仰であるというて、吾等が盲目的に之に従はねばならぬといふことはない。疑ふ可きは疑ひ議すべきは議せねばならぬが、幾千年幾萬年の間聖賢と仰がれて居る人の立てた所のことには重きを置いて研究せねばならぬ。さうして此の中に自己の全く満足すべき理想

を發見したら、己はその聖賢と共に同一理想の實現に努むるがよいのである。いづれにしても、人類に最も大切なる理想の設定には十分の注意を拂ひ、決して輕々に之を立て又輕々に之を破壊してはならぬ。

第二 宗 教

宗教とは何であるか。之を概言すれば人に理想を與へ、その理想と人との關係を教ふるものである。併しながら人に理想を與へるものは宗教のみではない。倫理も人生の理想を覺らしめ、此の理想に達する方法を教ふるものである。ゆゑに此の點よりいへば倫理も宗教も同じことであるが、唯その理想が倫理の教ふる所は冷なる形式であつて、靈格を有して居る血あり涙ある實在ではない。つまり人が斯くあるべきことを抽象的に考へた概念に過ぎぬのである。かやうな理想も勿論必要なることであつて、吾人の

日常の活動は之を標準としてその善悪を判断してゆくのである。併し人はたゞ冷なる概念を以て満足して居るものではない。此の理想に尊敬を拂ひ、此の理想に對して莊嚴の感を起し、此の理想を實現すべき法則の背く可らざるものであるといふやうな純粹理智の働以外に情意等加はつて來るものである。此の如くになつて倫理的理想も始めて生命あり精神あるものとして吾等の行爲を規定する力を信するのである。余は之を一種の信仰であると思ふ。

此の點より考ふれば信仰の行はるゝ範圍即ち宗教心といふものは、存外廣く人々の間に行はれて居ることと思ふ。我國では明治維新の後新文明の打ち立てに急であつた爲め、その當時我に於て最も缺乏を感じて居た自然科學及び各種の技術工藝の輸入に全力を注いだ結果として、一般に宗教の如きは時勢後れのものゝやうに考へられ、學者とか識者とかいはれる人は

盛に宗教に反對して無宗教を以て誇とする程であつた。これは勿論時世の反動であるが、之と共に宗教家に時代の精神を指導すべき偉大の人物がなかつた爲めである。併し又余が前に説いたやうな意味の信仰は、何時の世如何なる時にも人々の心から全く消えて無くなるといふことはない。此の點より見れば盛に無宗教を唱へた學者先生も、實は自己流の一種の宗教を有して居つたのである。なるほど佛教とか耶蘇教とか今現に行はれて居る宗門宗派には歸依せぬにしても、苟も學者として理想の無いものはないであらう。此の理想に對して敬虔の心を持たぬものはないであらう。余は此の心が既に一種の宗教心であると思ふ。

以上に述べたのは宗教心の一般の状態に過ぎぬが、たとひ形式は同じでもその内容にはいろいろの變化があり程度がある。たとへば自然現象を畏れて之を崇めるもの、山川河海の偉大を嘆美して之を拜むものなど、一寸

見れば實に馬鹿氣たことであるが、その具體的の物を離れてかやうな崇拜信仰の起つて來る根本の心を研究して見れば、畢竟自己以上の或物、自己の力の及ばぬ偉大なる物を理想とし、之に憧れ之を畏れ之を慕ひ之に依頼する信仰即ち宗教心に外ならぬのである。動物崇拜や庶物崇拜や魂魄崇拜（ソウル・スピリット・オブ・オブジェクト）や祖先崇拜（アンセストル・ウォルshipping）や崇拜の對象となるものにはいろいろの差違があるけれども、つまり之を以て各自の理想とし、各自のすべての行を支配されて居るものとして信仰する點は一である。此の有様は同じく現代に生活して居る人も、倫理上の理想標準とする所が種々に違ひ良心の働にもいろいろの程度があるのと同様である。教育の乏しい下等の人が道德の標準の低いのは勿論のことであるが、併しそれが爲めに是等の人の間には道德がないとはいはれぬ。たとひ吾々から見れば不道德のことであつても、彼等は之を道德的の行と信じて行つて居る類のことが多いのである。それゆゑその實質は

いろいろに異なるけれども、道德心や宗教心は上下おしなべて人には皆存在して居るものであると共に存在すべきものである。

然るに學者や識者が宗教を厭ひ或は之を卑しむに至つたのは、前に述べたやうに時世の反動と、宗教家に人物がなかつたといふことが直接の原因であらうが、なほその外に古來の宗教に迷信が多いといふことが理性を貴ぶ學者等に厭はしい感情を起さしめた大なる理由であらう。實際吾々が動物崇拜庶物崇拜の状態を目撃すると、實に馬鹿らしくも亦氣の毒に思はれるのである。現在我國の佛教や基督教を信じて居る者の間にもいくらかも迷信が行はれて居る。其の外神道の一派として宗教の形を取つて居る教の中には甚しい迷信がある。是等は何人が見ても厭はしく思はざるを得ぬことである。そこで深く心を宗教に寄せぬ人々が、是等の状態を見て宗教は迷信の塊である。愚夫愚婦を瞞着するに過ぎぬものであるといふやうに思

うたのは、彼等の思慮の足らぬ爲めとはいへ、また無理からぬことである。併したどひ迷信にもせよ多くの人々が崇拜歸依するといふ事實には、何等か根本に横はる人間自然の要求があるに違いないのであるから、苟も研究的態度を取るものは、上べに着いて居る種々様々の檻樓を取り捨て、其の眞體を認めねばならぬ。眞體は何であるかといへば、つまり前に述べた理想に歸着する。此の理想に勝手に種々の感情種々の勢力種々の人格を附して、漫りに恐れ妄りに祈り漫りに諂ひ妄りに崇めるのが迷信である。迷信の對象たる理想其の物も、無形の靈格などいふことは到底分らぬゆゑ、狐でも狸でも彼等の多少不思議とし多少恐ろしく思ひ居るものを持ち來たすに至るのである。それゆゑ人生の最も高尚にして又最も大切なる理想の働きは大部分滅却せられて仕舞ひ、唯各自の慾望を満足させる一種の道具のやうになつて來たのである。

それゆゑ迷信の排斥すべく似而非宗教の厭ふべきは勿論であるが、それが爲めに宗教の全體を排斥し厭惡するといふは、眞に謂れなきことであるのみならず、事實上能はざることであらう。たとひ現在行はれて居る宗教を排斥しても、余の所謂廣い意味の宗教は何人も之を棄てることは出來ぬ。若し之を棄てるなら、理想を絶つて唯現在本能の衝動に随つて生活する外はない。かうなれば人も動物も何等の區別はなくなる。故に余は絶対に宗教を排斥するものは人を率ゐて禽獸たらしめるものであると言はうと思ふ。随つて純粹の理想に基いた健全なる宗教は、自らも厚く信じ人にも勧めたいと思ふが、之と反對に不健全なる迷信的偽宗教をば此の世から驅逐したいと思ふ。

第三 佛 教

一五六

佛教とは何であるか。佛教とは「ほとけ」即ち佛陀を理想とする宗教である。佛陀とは覺者といふことである。それゆゑ何人も此の覺者になるのが佛教の理想である。佛教は其の初印度で起つた。ゆゑにその教の中には印度の思想傳説風俗習慣いろ／＼の事が入つて居らう。併しその眞髓たる思想は、時間をも空間をも超脱して居る眞理であるから、決して印度に限られ又その歴史に限らる可きものではない。佛教を説いた最初の人は釋迦牟尼である。釋迦牟尼は大覺者として自分自ら理想の實現者となつたのであるから即ち佛陀である。併し佛陀は釋迦牟尼一人に限つたことではない。古來無數の佛陀がある。これは何れも理想に達した人々である。故に人として具體的の個性を有して居つた點から見れば、古來佛陀は無數にあつた

わけであるが、覺者として大理想の體現を得た點から見れば一である。乃ち佛陀は一即多多即一で不生不滅の實在である。

世間には佛教は印度の教である。印度は佛教などを信じて居つたから滅んで仕舞つた。故に佛教は亡國の教であるといふやうな子供らしいことをいふものもあつた。併しこれはもとより取るに足らぬことであるが、第一に事實が間違つて居る。若し印度に眞の意味で佛教が盛に行はれて居たら、決して國が滅びるやうなことは無かつたらう。眞の佛教が行はれず、たとひ佛教の名の下にあつても、種々の迷信やつまらぬ儀式風習が跋扈して純粹大理想實現の教は滅却して仕舞つて居たから、國民の精神も退化するやうになつたのであらう。況して佛教を印度の教などいふのは眞理が世界の共有であることを忘れたものゝいふことである。若し此の流でいふなら、引力は英國の人が發明したから英國の眞理といはねばならぬであらう。

一五七

釋迦が佛教の眞理を發明して世間に恩澤を垂れたのは誠に感謝すべきことである。これはニユートンが引力の理法を發明して呉れたのと、事の大小こそあれ別に異つたことはない。それゆゑ佛教で釋迦を尊信するのは勿論であるが、之を亡國印度の歴史上の人として尊信するのではない。理想を覺り理想に同化し理想を體現した靈格としてある。それゆゑ信仰の對象としての釋迦牟尼は宇宙的實在である。歴史や國土に拘はるべきものではない。

余は前に釋迦が一人佛陀ではない、古來理想を體現した人は皆佛であるというたが、それはたゞ歴史上の話でなく、今日唯今でも吾々凡夫が皆佛性を持つて居るのである。吾々の理想は完全なる我である。完全なる我は即ち佛である。故に我と佛と凡夫と菩薩といふやうに區別は著しいが、畢竟は理想體現の如何にあることである。我が理想を體現しさへすれば即身

即佛である。我國の習慣として佛といへばすぐに墓とか死とかいふことを思ひ出し、死なねば佛にならぬものと思つて居るが、それは大間違である。此の生きて活潑々地の働きをして居るその身の儘が、覺りによつて佛になれるのである。何等の修養もせず醉生夢死するものが、どうして死んでから佛になられうぞ。世間の生物識等が佛教は偶像教である、人として木や金でこしらへた偶像に頭を下げたり祈つたりするのは實に愚の極であるといふが、是等は外形を見て眞の佛教を知らぬのである。前にも述べた如く佛陀は十方の諸佛とか三世の諸佛とかいうて非常に澤山あるが、理想からいへば釋迦一佛である。そうして三世十方の諸佛も吾も歸着する理想は皆釋迦即ち唯一大理想である。故に佛陀を拜むといふはつまり完全なる我を拜むのである。此の完全なる理想を前に置いて、此の不完全なる我が自己の無知無力無能をおもひ、或は之にすぎり、或は自ら奮つて之に追求せ

んとするのが佛教の主旨である。佛を敬するものは我を敬するもので佛を尊ぶものは自ら尊ぶものである。なせならば佛は完全なる我の反射である故である。

斯く論じて來れば或は佛も人が随意に想像した作りものに過ぎぬと思ふものもあらう。勿論理想はすべて吾心で之を認め、之を信するのであるから、佛も吾心の外ではない。併しながら決して各人が随意に想像した影ではない。自然實際に斯くある、又斯くある可き實在である。たとひ佛といはぬとも、各人に高かれ低かれ理想の存して居るのは、これやがて人に最大理想の根本的に存して居る證據である。これは事實であつて又標準である。それゆゑに余は理想を説く時に理想は各人の要求から起るが、併し各自が勝手な想像を書いたのでは眞の理想とはいはれぬ、聖賢が立てたもので、歴史的に發展し來り、吾々の理智にも情意にも十分の満足を與ふる

ものを選ぶべきことを注意したのであつた。余は今日及び今後學問の發達人智の上進に伴ひ、吾人の理想として十分の満足を與へ得べきものは佛教であると思ふ。勿論佛教にも各宗各派各々主張を異にして統一する所を知らぬ状態であるが、其の選擇問題は後に解決することゝして、佛教根本の思想各宗各派に共通して居る主義が、最も今日及び今後の科學哲學と一致すべき教であると信する。

耶蘇教では神があつて天地萬物を造つたといふ。故に神は造り手であつて人は造られたものである。神は永久に神で、人は永久に人である。人が神になることは未來永劫出來る時はない。古人はこれで満足して居つた。否今日でもこれで満足して居る人も多いのであるが、學術は到底これと一致しない。そこで學問のある人は眞正に精神から之を信する者が少いといふことは疑なき事實である。勿論世界創造説や神が人の爲めに動植物を造

つたといふやうな説は、耶蘇教の根本的主要の教義ではあるまい。之に比すれば耶蘇を神の子と信するか、信せぬかといふことの方が大なる問題であるかも知れぬ。併しこれさへ信せず、耶蘇はたゞ一の宗教的天才であるとする者が少くない。これとても耶蘇教の根本主義を覆すほどのことではあるまい。たゞ人と神との間に鴻溝を置いて永久に區別するといふことは、今後の人心を満足せしめ、學術と一致することが難いであらう。一寸見れば佛教中の真宗なども此の點は同じやうに思はれるが併し前にもいふ通り、佛教には根本的に佛陀と我との全く異なるものでなく、我も佛陀になられるといふ思想が横はつて居るのであるから、たとひ外形は同じでも根本主義には異なる所があると思ふ。

余は是等の點から考へて、今日及び今後の宗教は宜しく佛教を選ぶべきであると思ふ。世の青年等は佛教を信するといへば頑迷固陋のやうに思は

れはせぬかと心配し、偶像教であると言はれて之を信するは恥かしいやうに思ふものも少くないやうであるが、真理のある所は水火をも避くべきではない。決して人言などを顧みる必要なのみならず、偶像を拜むのが佛教でないことは前に述べた通りであつて、而かも佛教の理想は最も進歩した高尙なるものであるから、余は苟も人生問題に心を寄するものは、佛教に來らんことを勧めるものである。蓋し佛教は後來世界の進歩と共に、最も高尙なる人類の宗教となるであらう。

第四 日蓮宗

日蓮宗は今より六百五十餘年前に日蓮上人に依つて立てられた佛教の一派である。上人は幼時から非常の精力を以て佛教を研究し六千餘卷の藏經を讀破されたが、此の多くの經文と共に、一の佛教でありながら幾多の

宗旨宗派があつて、何れに眞理があるか茫漠として尋ね難いのに苦悶された。併し宗教上の天才たる上人は決して長く此の苦悶に彷徨れる人ではない。忽ちに釋迦佛が無量義經に於て「方便力を以ての故に四十餘年には未だ眞實を顯はさず」と言うて居られることを發見された。佛が成道の後四十餘年の間に説かれた經文は華嚴經(三七日)阿含教(十二年)方等般若經(三十年)である。その後説かれた經には法華經涅槃經等があるが、その主なるものは法華經であつて、佛自ら「我が説く所の經典は無量千萬億にして己に説き今説き當さに説かん、而かも其の中に於て此の法華經は最もこれ信じ難く解し難し」というて居られる。そこで上人は理想の緒を得られたが其の性格が偉大にして堅固であるから、たい理想の閃を捕へて直ちに自ら信じ人に説くことはせられぬ。二十餘年の間尙も智を増し見聞を廣め法の研究に助となることは調べ盡されて、いよいよ法華經に説く所が佛の眞

意であるといふことを確められた。一方に此くの如くに教理の上から十分慎重の研究をせられたと共に、他方には佛の豫言の上から、當時に於てどうしても法華經が我が國に行はれねばならぬといふことを確信せられたのである。即ち法華經には此の經が佛滅後二千年より後の五百年に現はれ、その時之を弘める者が種々の艱難辛苦に出遇ふことが明かに記してあつた。さうして當時丁度釋迦滅後、後の五百年に相當して居つたのみならず、瑜伽論には「丑寅の隅に大乘妙法蓮華經の流布すべき小國がある」と記され、或は彌勒菩薩は「東方の小國に法華經が弘まる因縁がある」といひ、近くは我國の傳教大師も「我日本は法華經流布の國である」というて居られる。かやうに内外一致して何れの點から見ても、法華經が佛陀の眞實の教であつて、而かも我國に弘まるべき運命を以て居るといふことは、上人の心に堅固なる信仰となつて、何物の抑壓も迫害も到底之を翻さしめることは出

來ないものとなつた。それで上人は斷然意を決し、三十二歳にして法華經歸依の宗門を立てられたのである。その後の上人の身にふりかゝつて來る大難は丁度佛の豫言の通りで、上人によつて佛の豫言は之を現實にせられたのである。

以上法華經の歴史より見ても佛陀思想發展の最高主要なるものが、此の經に包含せられて居ることは明である。世には大乘非佛教などいふ議論もあつて、大乘はすべて釋迦の直接の教ではないといふものもある。併しかゝる歴史的の穿索は信仰上に重きを置くに足らぬ。たとひ眞に釋迦が直接に教へぬにしても、釋迦の精神を發展せしむれば、大理想の歸着する所はどうしても、こゝに來らねばならぬのである。それで法華經はその内容よりいっても最もよく純粹佛教の大理想を現はして居ると思ふ、現に日蓮上人が法華和讃に於て「妙法更に外なし。我等の一心とこそ聞け。心佛衆生

は一つなる。圓頓法華の妙理なり」というて居られる。これが實に法華經の眞髓であつて、又佛法の純粹理想である。妙法蓮華經はたゞ紙ではない、たゞ墨汁が縦横に着いて居る文字ではない。實に靈格の代表である、否直ちに靈格そのものである。前編に於て余が説いた釋迦と十方三世の諸佛とは一であるといふ點より考へれば、妙法は即ち釋迦である。釋迦は即ち日蓮である。故に日蓮は即ち活きた妙法である。純粹概念の上よりはかやうになるのである。併しこれのみではない。更に進んで説けば我の理想即ち完全なる我は妙法である。日蓮上人がたゞ妙法蓮華經に歸依し題目を唱ふれば佛となられると教へられたのは、決して怪むべきことではない。眞に妙法と合體して之を唱へ得るに至れば、煩惱は即ち菩提である娑婆（不足の多い此の世界）は即ち淨土である。余は世の識者がかの大鼓を叩き大道を騒がしく練り歩く者の行爲の馬鹿氣たるを見て、直ちに題目を唱へるこ

と全體を無意味とし又は迷信とせざらんことを望むのである。併し日蓮上人はたゞ題目だけ唱へて居れば、何にもせずともよいといふやうな佛法を日常の事業と別にするには教へられなかつた。その遺文の中に「御みやづかいを法華經とおぼしめせ、一切世間治生産業皆實相と相違背せずとは此れなり」というて居られる。是れである！あゝ此の事である！理想の實現というても、佛となるというても、必ずしも、遠い未來ではない。日々夜夜に吾等の行うて居ることが即ち佛法となり、理想の實現とならねばならぬ。十萬億土といひ、靈山淨土というても、實に目前手近にあるのである。此の積極進歩活潑潑地の教法こそ、未來世界統一の天職を荷うて居る國民が信すべき教ではないか。以上はたゞ日蓮宗が佛教の最高思想に基き、純粹なる理想を有して居ると思ふ一端を述べたに過ぎぬが、日蓮上人は佛の豫言に従ひ此の經文を我國に弘むるに就いて、我が國民の天職を指示さ

れた。それは今日の語を借りていへば文明の統一である。實に我國は地勢からいうても、歴史からいうても、世界の文明を統一するに最も適當して居る。佛教などを少しも知らぬ西洋人でも、我國が東西文明の結合點であつて、將來我國民が兩文明を統一するであらうといふことを言ふ者がある。併しこれは現代の話であるが、上人は遠く六百餘年の昔にちやんと此の意味を斷言して、我が國民に民族的大理想を鼓吹されたのである。上人は屢屢「佛法は月の國より始めて日の國にとゞまるべし。月は西より出で東に向ひ、日は東より西へ行事天然のことほり磁石と鐵と雷と象華のごとし。誰か此ことほりをやぶらん」との意味をくりかへされて居る。即ち上人は法華經を我國より逆輸入して、支那印度より世界一般を統一すべき天職が我が國民にあることを確信斷言せられたのである。これぞ眞に我が國を愛し、我が國をして生命あらしむる教ではないか。上人が「我れ日本の柱と

ならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」と誓はれしことの大に意味あることが分るのである。我國の臣民たるものは老若男女何人たるを問はず、實に世界統一といふことを以て目的として働かねばならぬ。いつも自分の言行を反省して、「是れで世界統一の天職が完うせられるか」と、自ら問ひ自ら勵ましてゆかねばならぬ。それには此の思想を創めて我國民に與へた日蓮上人を常に頭に置いて自分を上人に比して見るがよい。

余は此の書の讀者にすゝめるが、佛教の教理がむづかしいなら必ずしも一概に急に之を覺らうとせず、疑があらば徐ろに人にたゞし書に考へて見るもよからう。併しそれよりも先きに先づ日蓮上人の傳記を読むがよい。上人の傳記は後人の書いたものもいろ／＼あるが、上人自ら書かれた「種々御振舞抄」を熟讀するがよい。それから「開目抄」なども反復して讀んで見

るがよい。佛法は嫌いでも宗教はいらぬといふ者でも、苟も感覺を有し感情を持つて居る人ならば、必ず何等かの感が心に湧いて出るであらう。偕て其の感が湧いて出たら、更に遺文録の他の部分をも讀むべく、その外の佛書をも讀むがよからう。

上人一代の歴史はたゞ立志篇の意味で讀んでも、實に景仰歎美人をして感奮興起せしむるものがある。上下三千年我國の歴史に於て、かゝる強健なる精神を有し、かゝる艱難に打ち勝つた人はない。併し佛であるからありまへであるというてはならぬ。なるほど上人は佛であらう。併し吾々も佛性があるではないか。佛となることが出来るではないか。否所謂佛教といふものを信ずると信せざるとに係はらず、實は皆佛陀に向つて進みつつあるのではないか。上人を模範とし標準とし、上人の經驗されたほどの困難辛苦に堪へるなら、誰も必ず日蓮になれる、釋迦になれる。滿天下の

青年よ。卿等は奮つて日蓮に來り、日蓮とならぬか。余は實に日本國に一人も多くの日蓮が生じて妙法の大理想を以て世界の人類を救ふの偉業を成すに至らんことを冀ふものである。

第五 經 驗

最後に余は余の經驗を述べて後の日蓮に來る人の參考に供したいと思ふ。余も一般普通の青年の如くに宗教的煩悶は、十六歳から十七歳にかけて起つたのである。其の時は敬愛して居る友人に敬虔なる基督教信者があつて余も之をすゝめられ、前後三年ほどは基督教で安心を得て居た。併しその後科學哲學を修むるに従ひ、漸く宗教の馬鹿氣たることを感じ、何時となく基督教とも遠ざかり、其の後はあまり現存の宗教に就いて彼是心を勞したことはなかつたのである。併し二十四五歳にして哲學の研究から、一時

禪に心を寄せたこともあつたが、これも熱心の信仰を起すには足らず、ただ多少事物の見解に就いて益する所があつて、あまり物に拘泥せぬやうになつた。斯くの如くにして四十二歳の昨年までは所謂廣義の宗教、我流の信仰はあつたが、特に佛教に興味を持つては居らなないのである。

然るに昨四十年二月十六日の日蓮上人降誕會に、日蓮宗大學で一場の講話をすることを頼まれたので、何か上人に關係のあることを話したいと思つて、傳記やら遺文録やらを借りて來た。併し演説までに約三週間ばかりの時日があるばかりであるから、とても多くの書を調べることは出来ぬと思つて、先づ小川泰堂の「日蓮大士眞實傳」を読んだ。讀み行く間に言ひ知れぬ感興が興つて、一氣呵成につけて讀んで仕舞つた。「是れはどうも豫想外の人物である」と思つて、それから更に遺文録を繕き先づ「種々御振舞抄」を讀んだ。これは往年高山樗牛が鎌倉に居つて、丁度日蓮から「イ

ンスピレーション」を受けて居た最中に、余は田中喜一氏と共に同人を見舞つたら「御振舞抄」の一部分を熱情を込めて聞かして聞かせ、その文章の生氣あることを嘆美して居たことを思ひ出したゆゑであつた。そして讀んでゆく内に「わづかの小島のぬしらをござんををちては閻魔王のせめをばいかんがすべき。佛の御使となのりながらおくせんは無下の人なり」といふ所に至りては、既に骨鳴り肉躍るの概があつたが、更に進んで「日蓮は幼若の者なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし。わづかの天照大神正八幡なんぞ申は此の國には重けれども、梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし。されども此神人なんぞをあやまちぬれば、只の人を殺せるには七人半なんぞ申すぞかし。太政入道隱岐法皇等のほろび給ひしは是れなり。此はそれにはにるべくもなし。教主釋尊の御使なれば、天照大神正八幡宮も頭をかたづけ、手を合せて地に伏し給ふべき事なり。法華經の行事をば

梵釋左右に侍り日月前後を照し給ふ。かゝる日蓮を用ゐぬるともあしくうやまは、國亡ぶべし。何況んや數百人にくませ二度まで流しぬ。此國の亡びん事疑なかるべけれども、且らく禁をなして國をたすけ給へど日蓮がひかうればこそ、今までは安穩にありつれども、法に過れば罰あたりぬるなり」といふに至つて、余は實に感極つて覺えず遺文録の上にひれ伏したのである。

此の時余の頭には第一に理想といふことが閃いた。「ア、是れ一個肉團の日蓮が言ふ語ではない。理想が言はするのでなる。否有り難き佛たる日蓮の勅である」と思つた。それと共に「大丈夫佛たる可らずや」との奮勵心が、勇猛に衝き來つて禁じ得なかつた。帝王を望んだり封侯を願うたりする者はたとひ力があり徳があつても、帝王の鉢合せや封侯の供給過多で到底皆の者が志を遂げる事が出来ぬのみならず、後には一身一家の破滅をも

起すのである。併しながら何人も佛にはなれる。佛は實に人生終極の最大理想である。佛はあらゆる人的階級に超越した尊いものである。彼も佛なり。我も佛なり。我はたゞ修行が足らぬのであると考へて生來覺えなきほどの謙讓の念が起り、^まやがて又奮然起つて遺文録を讀んだ。それからには夜に遺文録を手に離さず、二月十六日の演説までには佛敎の大意から日蓮宗の起る所以、宗祖の一代及び當時の歴史等を了得して初め頼まれた時實に厭やであつた演説が、早く試みたくなつたのである。それは昨年の大崎學報に載つて居る「發生心理學より見たる日蓮上人」と題するものであつた。

爾後余の心中には暇あれば上人の風采が往來し、時あればその遺文録が眼を照らし、余の精神界に一大變動を來たしたのである。かく精神界に變動を來たすと共に、身體にも非常の變化が生じて、かねて蒲柳の質であつ

た余は次第に肥滿し、次第に健康を加へ來つたのである。昨年の秋日蓮宗大學の學生と共に、伊豆の遺跡を巡禮した時の如き、余は生來多く經驗せぬ困苦缺乏に出逢つたのであるが、如何なる時にも上人の佐渡塚原の三昧堂や身延の奥の茅屋住ひの時の艱苦を思ふと、余の心には幾倍の勇氣を生じて、眼前の困苦に無頓着になつて仕舞うたのである。余は靴を穿つて山坂の石道をたどり、或は雨の田圃に足踏みすべらして足の指を痛め、終に兩足の小指の生爪は取られて仕舞つたのであるが、それほど苦痛にも思はずして忽ちに癒えた。その他余は身體の弱かりし爲めに、食物に就いては随分やかましい方であつたが、これも宗祖の流離艱難を思つては、如何なる物にも不足を言はぬことにして居たら、此の頃では殆んど如何なる食物でも愉快に食し得られぬものはないほどになつた。これは勿論一般健康の進んだ結果であるが、その本は精神の大刺激から來たのである。

又余は殆んど二十年來寒暑を通じて冷水浴を行うて居るが大寒の曉、殘月に照らされたる湧泉の水を汲み氷雪の間に立つて頭から數十杯浴びる時分には、毎に必ず雪の塚原を思ひ起さぬことはない。さうして自分の心に莊嚴な崇高の感が油然而として湧かぬ日とてはない。併し余は決して自分が妙宗の堅い信仰を有して居る所謂本化優婆塞であるといふことは自ら信せぬ。余の如きは今なほ信仰の經驗にすゝみつゝあるもので、眞の得信の士は決して余の如きものではあるまい。余が心の勵余が心の悦に十百倍する境遇に達するであらう。併し兎に角余の如き薄信の者でも日蓮上人が頭に宿つてから、日常の行住坐臥すべて活き／＼として、喜と希望とを以てすることが出来るやうになつた。識者から見たら可笑からう、専門の宗教家から見たら子供らしからう。併しこれは紙や舌から得た空談ではない。實に余の色讀體得した實驗である。余は實に斯くの如くにして大理想は實現

せらるゝものであり、斯くの如くにして進んで止まざれば佛陀となり、日蓮となることの出来ることを確信するものである。人生の理想に儼るゝ者よ。來りて吾等と共に大理想の實現に努めずや。

忠愛心の養成と日蓮主義

我國では國民の皇室に對する忠愛心の存在して居るのが、其特色として世界に誇るに足る事としてある。この頃外國人は盛に此の點を取調べて居る、米國の如きは忠君愛國の哲學を大學の講堂で講じたり、國旗を禮拜させたり、又神に禱りをしてから後鐵砲の訓練を遣る様にして居る。然るに忠君愛國の本家本元たる我國に於て何たることであらうぞ、口にするだに汚れたる痛恨事の發生して、北條義時以上の亂暴を爲すものあるは何う云ふ譯であらう、彼は一種の精神病者で氣狂であると樂觀するものもあるが、斯かる思想は突然に發生したものではない。世の中の不安は淺間山以上である。實に之を思ふと胸がつまる様に覺ゆる。

忠君愛國は理屈でない。君に對し國に對する同情である。君の御心を自己の心として考へ奉り、自己と國家と合體するところに忠愛心は起る。同情は物の心を酌み取ることであつて、苦樂の境遇共に起るものであるが、特に苦痛困難に會するときは同情の起り易きもので、得意の場合には反て反情を起すのが人間の常態である。砲兵工廠の附近の富士見樓が其川岸の方へ金網を張つて居たのは、勞働者が樓上の紅燈綠酒の遊興を見て、悶々不平の情に禁へずに礫を投げ付けるからである。苦樂共に同情するのは是は佛性の現はれで、親子の關係は亦然うでなければならぬ。然うして君臣の關係は正しく親子の様になつて居らねばならぬ。然るに小人は人の美を歎ばずであるから自動車で乗り廻はすものを見ると、何に生意氣など云ふ感じの起るのが多數の人の常である。忠愛心はこの多數平凡の者に必要であるゆゑ大に注意せねばならぬ、この事實から考へるのに、國威振はず國